MTDLPを活用した作業療法参加型臨床実習実例集

生活行為向上マネジメント

©Japanese Association of Occupational Therapists

一般社団法人日本作業療法士協会

本臨床実習実例集の転載にあたっては、日本作業療法士協会事務局に問い合わせください。
無断転載を禁止します。

発行日：2024年3月1日
発行者：一般社団法人日本作業療法士協会

目次

1 目次

1.1　本実習実例集の活用の仕方 …… 2
1.2　用語について …… 5

2 第1章　領域別の実習実例

2.1 身体領域 …… 6
2.2 高齢期・地域領域 …… 15
2.3 精神科領域 …… 24
2.4 小児期領域 …… 28

3 コラム

3.1目標の聞き取り～目標設定の工夫（養成校） …… 32
3.2目標の聞き取り～目標設定の工夫（精神科領域） …… 33
3.3目標の聞き取り～目標設定の工夫（認知症） …… 35
3.4目標の聞き取り～目標設定の工夫（小児期領域） …… 36

4

付録：協力校制度の概要、研修会の紹介、ガイドの紹介 …… 37
付録：MTDLP推進協力校連絡会について …… 39

5

執筆協力校及び臨床実習施設一覧 …… 40

本実習実例集の活用の仕方

1．本冊子を発行するにあたって

第四次作業療法五か年計画（2023～2027）では、「人々の活動・参加を支援し、地域共生社会の構築に寄与する作業療法」に焦点があてられることになりました。

この中に、

・養成教育での生活行為向上マネジメントに関する教育支援の整備と普及
・生活行為向上マネジメントの臨床での活用促進

が挙げられています。

上記５か年計画のスローガンを進めていく上で、MTDLPの考え方に基づく作業療法の教育は、養成校での授業、臨床実習、卒後教育を通じてますます重要になると考えられます。作業療法学生が、対象者の活動・参加を支援し、地域で生活していけるようにする実際の作業療法を経験し学びを深める上で、MTDLPに基づく作業療法参加型臨床実習がとても有効です。

そこで、今回、MTDLP推進協力校・強化校とその実習施設のご協力を得て、臨床実習の実例集を発行することにしました。この臨床実習のエッセンスをくみ取って頂ければ幸いです。

MTDLPに基づく作業療法参加型臨床実習（以下、MTDLP臨床実習）に関連する協会資料には、以下の3つの資料があります。臨床実習の目標の設定や組み立て方、実習指導の考え方、指導方法などについては以下をご参照ください。

・作業療法臨床実習の手引き（2022）
臨床実習指導者講習会資料として配布
・作業療法臨床実習の手引き［実践編］
臨床実習指導者実践講習会資料として配布
・MTDLPを活用した作業療法参加型臨床実習ガイド
重点課題研修「MTDLP教員研修」「教員と臨床家のためのMTDLP教育法」で
資料として配布
協会ホームページ：　https://www.jaot.or.jp/files/MTDLP.guide.pdf

２．MTDLPに基づく作業療法参加型臨床実習とは

図は、厚生労働省指定臨床実習指導者講習会（協会版）の資料にもある「MTDLPの考え方に基づいて診療参加型（CCS）の方法で指導する臨床実習：作業療法参加型臨床実習」のイメージになります。

MTDLP臨床実習は、MTDLPによる作業療法の捉え方や展開の仕方に基づいて、診療参加型（クリニカル・クラークシップ：CCS方式）の教育方法で指導する臨床実習です。CCS方式の教育方法の特徴は、図にもある通り、本来的な学習の機会となること、現場の仕事に関われる経験をすること、段階づけられた学習方法であること、実践知を学ぶことです。MTDLPの教育ツールとしての特徴は、作業療法を可視化することにあります。そのため、学生の理解の状況を捉えて必要な指導が行いやすいのです。

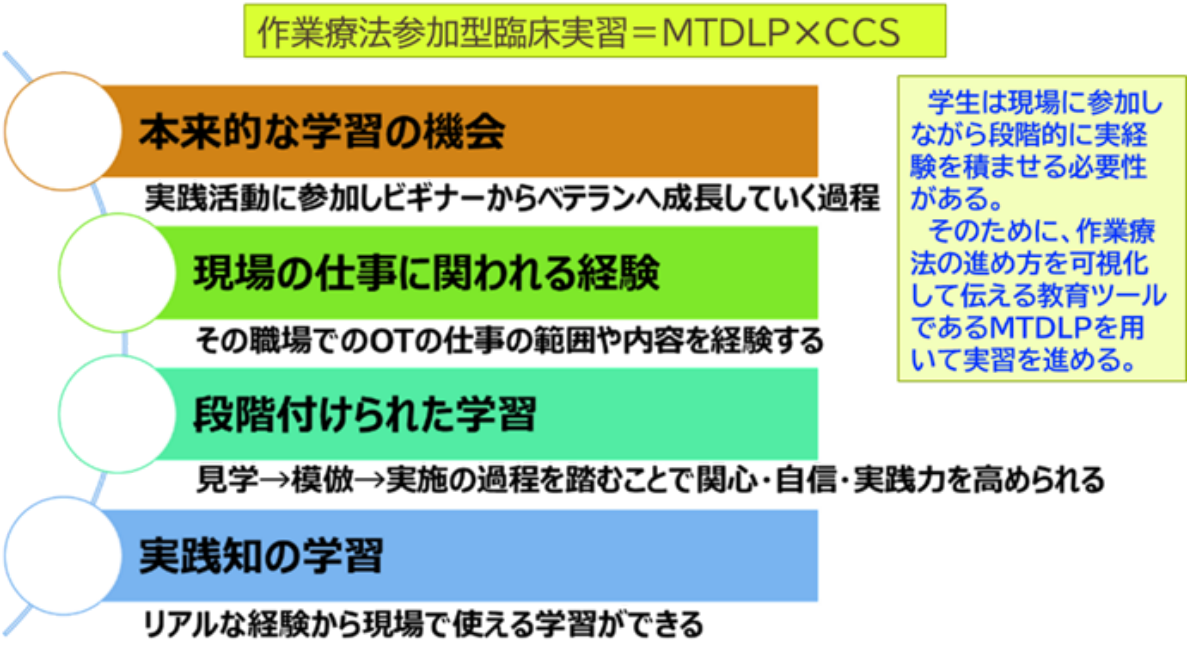


図　小林幸治：MTDLPを用いたクリニカル・クラークシップ方式による臨床実習ー学生の臨床実習への参加に焦点を当てて, 作業療法福岡, 2018

３．実例集作成の目的

今回作成した実習実例集は、これらの内容に基づいて行われた**実際の実習のエッセンス** を示したものです。多くは総合臨床実習の実例ですが、地域実習の実例も含まれています。
まずは、 **養成校教員や臨床実習指導者にMTDLP臨床実習のイメージを増やして頂くことを目的**に作成しました。

この実例集は2024年度からのMTDLP教育に関する協会研修（「MTDLP教員研修」「教員と臨床実習指導者のためのMTDLP教育法）の中で、研修資料としても活用します。

４．実例集が活用できる場面

この実例集は以下のような場面で活用できると考えています。

- **MTDLP臨床実習の指導経験が少ない実習指導者がイメージを持つ**
- **臨床実習指導スキルアップの資料として活用する（実習がよく展開できるコツを学ぶ）**
- **担当教員と実習指導者の打ち合わせの際に実習イメージを共有する**
- **実習指導者が学生と実習開始時に実習イメージを共有する**
- **実習特論等の授業内で学生に紹介し、話し合わせてMTDLP臨床実習のイメージを持つことに活用する**
- **臨床実習の勉強会の資料として活用する**
- **新人教育の参考にする**

５．実習実例集の読み方

この実例集は1実例1ページで紹介しており、MTDLP専用シートの記載例などは掲載しておりません。これは学生や対象者の個人情報保護という理由もありますが、MTDLP臨床実習のエッセンスを味わってほしいという理由によっています。これまでのMTDLP関連の書籍や資料において、特に事例の部分では、専用シートの記載例が必ず載っています。一方で、専用シートを使って行うのは対象者やその生活行為遂行に関する情報整理やアセスメントの統合と解釈の部分です。MTDLPシートを書くことが臨床実習の目的になるわけではありません。むしろ、MTDLP臨床実習のエッセンスは学生が **「対象者の生活行為に焦点を当てた作業療法プロセスを経験する」**ことや**「実習指導者と共に対象者の生活行為向上支援に取り組む」**ことにあります。その点で、ここに掲載されている実習実例では、いずれも、対象者にとって重要な生活行為を理解し、対象者と目標共有を行い、動機づけを行い、具体的なアプローチを行い、変化を捉え、関与する他職種や家族・知人や地域資源などを理解することなどにポイントが置かれています。

そして、各実習実例に「実例から学ぶ視点（解説）」を付けました。各臨床実習がよく展開したポイントを読み取り、皆様の臨床教育実践に活かして頂けることを願っています。

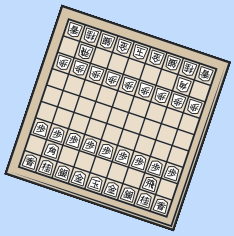
用語について

本書では、文章の構成、内容の一貫性、そして読みやすさを考慮して、以下の内容で文言を整理または統一した。

用語	整理または統一した範囲
実習指導者	臨床実習を行う指導者をすべて「実習指導者」で統一した。
学生	実習指導を受ける学生をすべて「学生」で統一した。
養成校	「理学療法士作業療法士学校養成校指定規則」あるいは作業療法実習関係規則などで用いられる「養成施設」という文言を除き、すべて「養成校」で統一した。
教員	養成校の教官および教員は、すべて「教員」で統一した。
対象者	作業療法の対象となっている患者および利用者は、すべて「対象者」で統一した。
MTDLP	生活行為向上マネジメント (Management Tool for Daily Life Performance) を「MTDLP」で統一した。
作業療法参加型臨床実習	クリニカル・クラークシップに基づいた作業療法の臨床実習のことを「作業療法参加型臨床実習」で統一した。
協会	一般社団法人日本作業療法士協会を「協会」で統一した。
協力校	生活行為向上マネジメント推進協力校認定制度規則におけるMTDLP推進協力校を「協力校」で統一した。
強化校	生活行為向上マネジメント推進協力校認定制度規則におけるMTDLP推進協力強化校を「強化校」で統一した。
新型コロナウイルス感染症	新型コロナウイルスに関連した感染症を、すべて「新型コロナウイルス感染症」に統一した。
ICF	国際生活機能分類（International Classification of Functioning, Disability and Health)を、「ICF」で統一した。

領域別の実習実例

身体領域



将棋クラブの再参加を目標に学生と共に取り組んだ実例

実習の実施環境：
専門学校3年生/総合臨床実習/13週間/回復期リハビリテーション病棟

実習の特徴

実習初期は、実習指導者の各担当対象者の評価と訓練の見学、模倣を中心とした。担当する対象者から実習の同意が得られたため、実習指導者同席のもとで面談を行い、興味関心チェックリストと生活行為聞き取りシートを用いて生活背景や現在の思い等を知ることから開始した。

実習中期は、各評価を行い、アセスメントシート、生活行為課題分析シートを用いて学生と共に情報を整理した。また、達成可能な合意目標を設定し、学生は模倣レベルでの基本的、応用的プログラムと学生オリジナルのプログラムを行った。

実習後期は、退院後の生活や将棋クラブへの参加を想定した社会適応プログラムを学生と一緒に考え、ソーシャルワーカーと連携しながら行った。退院前には、学生も担当者会議に参加し、生活行為申し送り表を用いて関係者と情報を共有した。

実習の内容

事例紹介：

対象者は70代男性、頸椎後縦靭帯骨化症や頚髄症により、上下肢の痺れ、筋力低下、手指の巧緻性低下等があり、日常生活において長男夫婦の介助を要していた。
将棋や友人との交流が一番の楽しみであったが、将棋クラブへの参加や友人との交流の機会が減少しており、「また友人と将棋がしたい」と話していた。

実践の流れ：

- 興味関心チェックシートを用いた面談では、『将棋』に関心があることを知り、そこから対象者が将棋クラブに通っていたことを知ることができた。再参加の希望があり、家族や友人との関係が良好であること、回復期リハビリテーション病棟に入棟したばかりで、十分な入院期間があること、経過から身体機能や能力の向上が見込めることから、達成可能だと判断し、「家族の送迎で月2回の将棋クラブに通い、友人と楽しむことができる」を合意目標とした。
- MTDLPの各シートを用いて課題と予後予測を学生と共有した。また、ADL場面で介入したり、看護師と介助量や介助法を確認したり、学生と対局したりすることで、学生と対象者が段階的に現状を理解しながら退院後の生活をイメージしやすいように働きかけた。徐々に、将棋の駒をさす練習や学生が考案し提案したボタン通しや洗濯ばさみを使用したプログラム、各ADL動作練習、自宅の環境調整、公民館の環境確認などにおいて、学生と対象者の自主的かつ主体的な言動が増加してきた。
- 学生と共に出席した担当者会議においては、生活行為申し送り表を提示して各関係者と情報を共有し、退院後の将棋クラブへの参加協力を依頼した。退院後は、課題分析シートの最終評価を利用してプロセスや退院後の方針を一緒に確認し、実習終了となった。

実習指導者の準備：

- 実習指導者は、MTDLP実践者研修修了者であった。
- 実際のADL場面でも関われるように看護師に協力を依頼した。
- 担当者会議に学生も参加する旨をソーシャルワーカーに伝え、関係者にも周知した。

実習後の振り返り：

専門学校の課題であるMTDLP全シートをまとめ、現状の把握と今後の課題を確認した。

学生コメント

MTDLPを活用し、残存機能を整理することで問題点を可視化でき、容易にプログラム考案へと繋げることができた。

また目標を共有したことで、チーム内での役割が明確になっただけでなく、対象者自身も目標に向けて積極的に取り組み達成することで自信にも繋がっていて、チーム全体で支援していくことの大切さを実感できた。

おすすめ度；★★★★☆

実習指導者コメント

学生は自身で考案したボタン通しなどのプログラムを行ったり、ADL動作を試行錯誤したり、環境や福祉用具を考えたりなど、多くのことに関わることでMTDLPの有用性を体験すると共に、対象者の自宅復帰や社会参加の一助にもなったと感じてもらえたと思う。

Point!

MTDLPを活用し、対象者の自宅復帰や社会参加を支援することで、学生の達成感を向上させることが期待されます。

教員コメント

実習状況の確認や実習後の事例報告において、関わった対象者の背景を踏まえ、生活行為に対する目標設定を行っていることが確認できた。

また、対象者の主体性を引き出すこと、チームアプローチの視点をもちながら実習を経験できたことは、MTDLPを活用したメリットだと思う。

【実例から学ぶ視点（解説）】

実習指導者と共に、医療での関わりから退院後の暮らしまでを考えることができ、素晴らしい経験ができています。この実例では、指導者、学生、そして対象者も含め、退院後の具体的な生活行為の目標を立案できる方を対象としています。これにより、学生や対象者も退院後の生活をイメージすることができたと思います。例えば、医療での実習では経験しにくい公民館の環境調整など、その方が暮らす環境までをも考慮できています。

さらに、学生が考案したプログラム実践を導入し、対象者の主体性を向上させるために工夫をしています。実習後期には、担当者会議への参加、多職種との関わりの機会、生活行為申し送り表の活用経験を提供しています。これにより、チームアプローチの重要性、チームの中でのOTの役割、チーム全体で対象者を支援していく大切さを実感できるような経験が得られたと思います。

骨折手術後に調理動作再獲得を目標に関わった実例

実習の実施環境：
専門学校4年生/総合臨床実習/10週間/急性期病院

実習の特徴

学生は、コロナ感染の流行によって評価実習が中止となり、今回の総合臨床実習がはじめての長期実習の経験であった。実習初期は病院の特徴、入院患者の状態について知り、実習に慣れる期間であった。実習中期には本対象者とは別の対象者にMTDLPを活用して合意目標の設定、MTDLPシートを埋める作業を行った。実習後期になり退院後の目標が明確な対象者が入院した。手術後間もない時期であったものの学生がMTDLPを活用するのが2回目であったこと、協力的な対象者で目標が明確であったため、MTDLPを活用して介入を進めることとした。

実習の内容

事例紹介：
事例は80代の女性、自宅で転倒し右上腕骨近位端骨折を呈し入院となった。入院後は手術が行われ、痛みに応じて右上肢の関節可動域訓練を中心に行うこととなった。入院前の生活は夫と二人暮らし、家事や車の運転、庭の草取りをしていた。入院期間は2週間の予定で、夫が心配なので早く自宅に帰りたい希望があった。

実践の流れ：
- 生活行為目標について、これまでの作業療法場面で「調理ができるようになりたい」という目標を聞き取っていた。
- 学生と実習指導者で、ご自宅の調理環境や上肢機能の評価を行った。学生と事前に合意目標について打ち合わせした。
- 生活行為目標をより具体的で達成可能なものに設定することとして、学生が主に対象者との面接を行い「1日3食、お汁や野菜炒めなど簡単なものから（必要に応じて夫に手伝いを求めて）調理をする」に決めた。
- 学生は対象者の調理環境を聞きながらリハビリテーション室で模擬的に調理動作や棚から鍋や皿の出し入れ、左手を使った代償動作の評価や練習を行った。
- 高齢の対象者に対してわかりやすいように写真付きの自主トレーニングのメニューを作成した。そのメニューには、左手で右手を補助しながら肩関節を挙上する運動だけでなく、調理を行う際に注意事項を記載した。対象者やその家族に、退院後に外来作業療法に通うことや自宅で右上肢の運動を継続することを説明した。

実習指導者の準備：
実習指導者は、MTDLP実践者研修修了者であった。実習指導者は、アセスメントシートの予後予測の項目を助言し、看護師や事例の家族と良好な関係を築くことができるように学生を紹介し情報収集可能な場面をセッティングした。

実習後の振り返り：
専門学校の課題である事例報告書をまとめた。事例報告書には、アセスメントシートやプラン演習シートを添付した。

学生コメント

模擬的な調理練習をすることによって、事例に自信がついているように思った。MTDLPを用いることで、事例にとってどんな介入が必要なのか考えることができた。

おすすめ度；★★★★☆

実習指導者コメント

術後間もない急性期の時期であっても、MTDLPを活用することによって機能訓練が何のために必要か、目標達成のために行うべき応用的プログラムを考えることができたと思う。

学生・養成校との臨床実習での共通言語としてMTDLPの活用はおすすめです。

教員コメント

実習修了後、対象者の発表を養成校内で行った。MTDLPを使った効果として、ストーリーが崩れずわかりやすい発表だった。
学生の対象者に対する考え方の理解度も高いように感じた。MTDLPを活用することで、学生も教員も共通理解がしやすいメリットがあるかもしれない。

【実例から学ぶ視点（解説）】
この実例では、実習指導者と共に急性期病院での骨折症例への予後予測に基づいた生活行為をイメージできる工夫がされています。生活行為の調理動作を実際の環境に合わせてシュミレーションして行うだけでなく、自主トレのメニューを見える化して対象者にもわかりやすく指導しています。
さらに、多職種や家族とも連携し易い環境を提供し、学生がマネジメントの流れをより把握できるよう指導を進めています。

洗濯動作再獲得を目標とした廃用症候群に関わった実例
ーICTによる指導者・学生・教員間での実習情報共有を用いてー

実習の実施環境：
大学4年生/総合臨床実習/9週間/回復期リハビリテーション病棟

実習の特徴

現場の臨床技術・臨床思考過程を実習指導者と学生と教員の三者間で共有することが可能になると考え、MTDLPの各シートをICTで共有して指導する方法を取り入れた（表１）。作業療法参加型臨床実習により、実習指導者が実施する作業療法を学生が見学し日々の情報をMTDLPの個人情報の匿名化された各シートに記入した。それをクラウド上に保管し実習指導者・学生・教員の三者が閲覧し情報共有した。教員は、学内にいながらMTDLPのシートを読み込むことができるため、学生が体験している実習の詳細が即座に理解できた。学生は、実習指導者と共に対象者の意味のある作業に焦点を合わせた作業療法の把握ができ臨床思考過程を学ぶことができた。

実習の内容

事例紹介：
対象者は90歳代女性。上行結腸癌手術後の安静により廃用症候群を呈していた。入院前の生活は娘と2人暮らし、対象者の役割は洗濯であり、庭の手入れや実妹の運転で外出・買い物を楽しみにしていた。入院前から通所介護（デイサービス）を利用しており、退院後もまた利用したいと希望が聞かれた。

実践の流れ：
実習指導者は、事前に生活行為目標の聞き取り方法を学生に説明し、その後、実習指導者が対象者から目標を聞き取る場面に学生も同席させた。

- 面談場面で「洗濯をまた行えるようになりたい」と聞き取り、目標を共有した。
- 実習指導者が行っている作業療法介入場面を学生に見学してもらい、対象者、実習指導者、学生の関係作りをおこなった。
- 対象者からは学生に対し、二層式洗濯機を使って洗濯するときに必要な動作について説明してもらった。
- 生活行為向上プラン演習シートを用い、合意した目標「洗濯機で2人分の洗濯を行い干し、たたむことが出来る」をたて、生活行為工程分析を学生に記入してもらい必要な動作の確認を行った。
- 院内で洗濯動作を行った後、外出訓練を実施。対象者と実習指導者・学生が同行し家族と一緒に自宅での洗濯動作の確認を行った。

実習指導者の準備：
当院では、リハビリテーション科内に臨床実習委員会があり、学生に対する説明用のMTDLP資料をA県作業療法士会主催の現職者研修会の生活行為向上マネジメント概論の資料を参考にして作成した。計画的に実習をすすめられるように9週間の予定表を作成した。実習指導者が担当していた別の対象者で制作したMTDLPシートを学生が閲覧できるように準備した。

実習後の振り返り：
臨床実習委員会が作成した実習終了時のアンケート（実習指導者用・学生用・教員用）を集計し、実習指導者全体で三者からの意見・感想や実習の進め方などを情報共有し、次年度の実習に反映できるように振り返りを行った。

学生コメント

学内でのMTDLPの授業はグループワークのみだった為、作成することに不安があった。しかし、実習中は、実習指導者から適切なアドバイスや情報収集の行い方など丁寧に教わり、各シートを完成することができた。特に課題分析シートの考察には時間をかけて行った。

おすすめ度；★★★★☆

実習指導者コメント

当院では、実習責任者（上司）・教員・指導者が情報共有するモニタリングシート（表２）を活用している。実習指導者は、一週ごとに実習責任者や教員からアドバイスをもらうことができ、安心して実習を進めることができた。MTDLPの進捗状況に対して足りない所や改善点等、作業療法介入時に対する助言をもらい、実習指導者自身気付いていない点について指摘を受けることができた。

教員コメント

MTDLPは、作業療法士の思考過程を整理できるため、学生が臨床に出た際に作業療法の組み立て方の参考になるのではないかと感じた。MTDLPの活用は、学生が目標設定においてボトムアップに偏りがちなところをトップダウンの視点にも気づかせてくれる。さらに、目標設定を対象者と合意を得るプロセスにおいて協働する点がよかったと感じた。

【実例から学ぶ視点（解説）】
この実例では、MTDLPを使いICTを活用することで、実習指導者、学生、教員の三者による臨床実習の状況をリアルタイムに共有しているところがポイントです。教員は実習の状況が即座にわかり、アドバイスをいつでも受けられるから学生も心強いです。それから、MTDLPを使った作業療法参加型臨床実習を実践されており、実習指導者の聞き取りの場面や作業療法介入場面を見学、模倣、実施と段階付けて経験させるため、今後の臨床にも活かしていけます。養成校と実習地が連携し、作業療法士を育てるための教育的な取り組みが体系化されており、大変参考になります。

表１

ICTを活用した臨床実習の利点（教員を対象にしたアンケート調査から）
• 時間差が少ない状態で情報共有ができる。 • 実習状況が具体的かつ詳細に把握できる。 • 毎週の学生の様子をWebを用いることで双方に負担なく共有出来た。今まで巡回時のみ様子を確認し、特に大きな問題がなければ養成校から実習指導者へ連絡することはなかったので、Webを用いることで軽微な変化や改善すべき点がわかった。学生の変化を追っていくなら週に1回の情報交換は有効だと思う。 • これまでの実習では巡回に行くまで学生の状況が分からず、実習の半ばで課題に気づくことが多くあった。Webで学生状況や実習指導者の指導内容、学生の思考過程を把握することが出来るため対応が行いやすいと感じた。

表２

OJT・実習モニタリングコメント記載表（5～6週目）
養成校：　A　　大学　　実習生名：B　　実習指導者：T
第５週目
実習指導者コメント； • MTDLP進捗状況； 具体的にシートを記入するというより、プランに立てた自宅での洗濯動作や庭先での動作訓練を行いました。洗濯動作に関しては院内でも行ってみています。プランを実施して結果をまとめていければと考えています。 • 学生の反応 学習量については「大丈夫です」と話しています。睡眠時間を削らないようこちらも声掛けしながら様子をみたいと思います。 • 実習指導者の感想 こちらでフォロー出来ることはしていきたいと思っています。
指導者コメント； 作業療法参加型実習では、OTが患者さんへ分かり易く説明し同意を得て訓練を進めていく過程を見てもらいます。対象者がやりたい事やしなければならない事についてできない理由としなければならない事を理解してもらえばいいのではないでしょうか。
教員コメント； 洗濯などのＩＡＤＬ訓練の経験は、学生が苦手な退院後生活のイメージ把握につながると思います。良い経験をさせて頂いています。 合意した目標（解決すべき生活課題）に対して、これを妨げている要因を付箋を利用して１つずつ書き出し、紙に貼りだして相互の関連性をみることで頭の中を整理します。 指導者がおっしゃるとおり、できない理由を理解すると共に、どうすればできるようになるのか（例：麻痺は変わらないが、今使っているこの道具を変えればこの動作はできるようになるかもしれない）を理解する目的となります。

更衣動作の介入を行い、空間認知や身体認知機能への効果を実感できた実例

実習の実施環境：
専門学校4年生/総合臨床実習/8週間/回復期リハビリテーション病棟

実習の特徴

前半2週間は実習指導者が担当している対象者に評価や訓練の補助に関わった。対象者とのコミュニケーションの中から、印象や人となりを把握していった。後半4週間ではMTDLPに基づいた介入を学生の考えを中心に、相談しながら進める方法を取った。

実習の内容

事例紹介：

対象者は70代の女性、自宅で右脳梗塞を発症し、急性期病院から当回復期リハビリテーション病棟へ転院した。重度の麻痺に加え、半側空間無視、感覚障害、褥瘡の影響でADLの介助量が多く、気分の落ち込みがみられた。「好きな服を自分で着たい」という語りを聴取し、MTDLPを用いて更衣に着目した介入を行った。

実践の流れ：

- 学生と症例の関係は良好であったため、聞き取りは実習指導者が同席のもと、学生が中心に実施した。
- アセスメントシートを活用して、まずは評価項目を列挙し、実際の評価を実習指導者と一緒に実施した。聴取した情報が不十分である点や更に深く掘り下げる必要な評価については、実習指導者にアドバイスを求めながら評価を実施し、他職種への聞き取りが必要な点は、学生が他職種に質問できる機会を作り、学生は十分な情報収集を行うことができた。
- 対象者の更衣動作を活動分析し、更衣動作獲得のために必要な要素を列挙した。介入方法については学生の考えを中心に検討し、配慮が必要な部分については実習指導者からのアドバイスをもとに検討した
- プランシートに基づき、実習指導者と一緒に病棟のミーティングに同席し、対象者の着衣の方法を病棟スタッフに伝え、統一してできるようにお願いした。また、対象者はテニスが好きであり、家族がリハビリテーションの時に着てもらえるようにテニスウエアーを用意してあったため、対象者が気に入っている服で練習を始めることとした。
- 対象者の自己効力感を高めるために、どのように関われば良いか学生は悩んだ。その際は実習指導者の対象者に対する更衣動作訓練場面を見学し、どのような変化がみられたか、どのような声かけの時にいい反応が見られたのかを実習指導者と一緒に振り返った。
- ポジティブフィードバックを用いて更衣動作訓練を実施している時が、対象者の反応を引き出せることに気がついた。学生は、声かけを工夫しながら、毎日練習を積み重ねることで生じる小さな進歩を見逃さないことが重要であることに気づいた。
- 学生の介入が終了した後は、同席していた実習指導者より治療の組み立て方や、特に症状が多岐にわたる高次脳機能障害の考え方を整理しながらフィードバックした。症状を点で見るのではなく、全体的にどう影響しているのかを一度整理したアセスメントシートを活用しながらアドバイスした。実習指導者は、鬱的な傾向にある対象者に合わせた声かけの方法など、自分の強みに目を向けられるような声かけをアドバイスした。作業療法士として重要な思考過程や知識も大事であるが、1つ1つの声かけが相手に影響することの重要性を学んだ。

実習指導者の準備：

様々な高次脳機能障害の問題がある対象者であったため、実習指導者は学生が混乱しないように、予後予測をはじめとした項目を助言し、対象者の強みに意識が向くような助言や環境調整を行った。

実習後の振り返り：

専門学校の課題である症例報告書をまとめ、OSCE（客観的臨床能力試験）にて作業療法介入の実践を発表した。

学生コメント

MTDLPを用いて臨床実習を行うことで、障害像や、作業療法を提供するための思考過程を理解することができた。本人が望む更衣動作を可能にする為に必要な介入を検討するための良いツールとなった。

おすすめ度；★★★★★

実習指導者コメント

様々な課題がある対象者だったが、MTDLPを用いることで課題を整理し、主訴を踏まえた目標を設定する事ができた。対象者も納得してプログラムに参加し、学生と信頼関係を築くことができた。

Point!

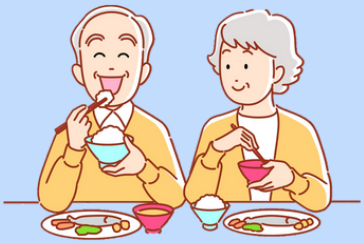
MTDLPを用いて見える化、主訴に基づいた目標設定により、対象者が納得しやすくなり、学生との信頼関係構築に成功しました。

教員コメント

MTDLPを活用したことによって、対象者の希望する作業に寄り添い、対象者に合う声かけや、小さな変化を見逃さないこと、常に対象者が中心であることを実践の場面で学べたことは、学生にとっても達成感が得られた実習だった。またMTDLPでの症例報告から学生・実習指導者・教員も共通の理解ができたと感じている。

【実例から学ぶ視点（解説）】

対象者は、さまざまな課題を抱えている方でした。特に学生にとっては、気分の落ち込みのある方への対応に配慮が必要と考えられます。しかし、実習指導者によって、学生と対象者の良好な関係が築かれ、目標の聞き取りを行うことができています。学生自身が目標を聞き取ることで、主体的な実習につながることが感じられます。また、学生が対象者の細かな変化に気づけるようになった過程が書かれており、実習指導の参考になります。



うつ症状のある骨折後の女性が妻としての役割を再認識する過程を経験できた実例

実習の実施環境：
専門学校3年生/総合臨床実習/9週間/急性期・回復期リハビリテーション病棟

実習の特徴

始めの1週間は実習指導者のもとで見学をし、病院や入院患者の特徴を捉えながら評価や訓練の補助に関わった。実習指導者が担当している対象者一人一人の入院経緯やOT内容などの説明を受けた。2週目に学生が担当する対象者が決まった。MTDLPに基づき評価・介入を進めていく方針であったが、対象者は自己否定的でリハビリテーションに消極的であった。学生は評価の進め方や結果の解釈など、都度実習指導者に相談・確認しながら全体像の理解を進めていった。実習期間中にMTDLPのプロセスにおけるインテーク、アセスメント、プランニングを実習指導者とともに共有した。

実習の内容

事例紹介：

対象者は変形性膝関節症の既往がある80代女性である。屋内移動中に転倒し右脛骨近位端骨折を呈した。入院前は夫と2人暮らしをしており、夫は鶏舎を営みながら対象者を介護しながら生活していた。対象者はADLに介助を要するものの、食事のメニュー決めや用意を担当していた。買い物は車椅子で夫とともに出かけ、食材選びは対象者が行っていた。今回の入院でギプス固定となり急性期病棟では歩行練習や下肢のROM訓練が中心に行われた。回復期病棟に転棟し、機能訓練を引き続き行うも、「なにもない、全部ない」と生活に対する空虚感を訴えていた。

実践の流れ：

生活行為の聞き取りは実習指導者見守りのもと行った。できるようになりたいことについて、始めは「なにもない」と話されていたが、興味関心チェックシートを活用しながら聞き取りを進めていく中で、生活場面について話されるようになった。

学生は対象者の現時点での生活機能を評価する視点はあるものの、これまでの生活をインフォーマルな会話から聞き取り・イメージすることに苦戦していたため、実習指導者が人間作業モデルの作業質問紙(OQ)と役割チェックリスト(RC)を用いてみるよう助言した。質問紙のやり取りから、退院後の家庭内での役割を再確認し「休憩しながら食事の準備・片付けができる」「夫との食事を楽しむ」との合意目標になった。

アセスメントシートを整理する過程では、関連性を示すため記載内容を線でつなぎ、心身機能・構造、活動と参加、環境因子の相互関係について理解を深めていった。

介入では買い出しメモの作成や夫との分担など、退院後に夫婦ともに負担なくできる方法を対象者と相談しながら進めた。

実習指導者の準備：

実習指導者はMTDLP実践者研修修了者である。脛骨近位端骨折のプロトコルを学生に説明しつつ、変形性膝関節症による影響も踏まえて予後予測が考えられるように資料や参考文献などを紹介した。

実習後の振り返り：

実習終了後、専門学校での実習後課題（事例報告書）をまとめた。報告書は生活行為向上マネジメントシートと補足説明シート（A4一枚）を合わせA4二枚分で作成した。また、担当教員と対象者に対して取り組んだ生活行為向上支援について振り返りを行った。

学生コメント

対象者の価値や興味を踏まえた目標設定の重要性が分かった。MTDLPのシートを活用することで思考の整理がしやすく、目標を対象者と一緒に共有しながら関われたことも良かった。

おすすめ度；★★★★★

実習指導者コメント

MTDLPを実習で活用することで、対象者の生活行為を達成するためにどのような支援を必要とするか明確になった。学内教育では基礎医学、臨床医学、作業療法評価・治療などそれぞれで学ぶことが多いが、MTDLPを用いることでそれらのつながりや作業療法の考え方が理解しやすくなると思う。

Point!

作業療法の流れ・考え方を理解するツールとしてMTDLPの活用はおすすめです。

教員コメント

過去・現在・未来とつながりある人として対象者を理解することの重要性が実習を通して実感できたと思われる。今後も生活全体を捉えて支援していくことを学生が理解できるようになるためにMTDLPを積極的に活用していきたい。

【実例から学ぶ視点（解説）】

この対象者では、学生が聞き取りから介入までのプロセスを実習指導者とともに進めています。これまでの生活をイメージすることに苦慮していた学生に対して、各MTDLPシートに加えて作業質問紙(OQ)や役割チェックリスト(RC)の活用を助言するなど工夫されています。これにより学生は、より具体的な生活のイメージを持つことができ、過去から未来へと連続した生活として理解を深めることができたといえます。また、アセスメントシートにおいて、ICFの相互関係を可視化する取り組みは、学生が思考過程を整理することができ、生活機能の理解を深めることにつながっています。

コロナ禍にて自宅退院後の農作業の獲得を目標に取り組んだ実例

実習の実施環境：
専門学校3年生/総合臨床実習/8週間/回復期リハビリテーション病棟

実習の特徴

コロナ禍といった社会的背景もあり、学生は直接事例に触れることが制限されていた。そのため、実習前半は、対象者の背景因子等について診療録および他部門から情報収集を行い、訓練・動作場面を観察し心身機能面の評価を実施した。実習中期よりMTDLPに基づいて対象者とインテーク面接を行い、合意目標の決定、課題の抽出・焦点化、介入方針、訓練プログラムの立案、再評価を進めていった。

実習の内容

事例紹介：

80歳代女性、脳梗塞により左片麻痺を呈していた。対象者は、やりたいことは明確だが、自立心は高くなくやや依存的であった。元々は農家であり、独居（同敷地内に息子夫婦が在住）。病前生活として、午前中は畑作業、午後からはテレビを観る生活を送っていた。心身機能面は、中等度の左片麻痺や立位バランスの低下、軽度の注意障害を認めたが、認知面には大きな問題を認めなかった。ADL面では、トイレ動作時の下衣操作や更衣の裾直し、入浴動作に介助が必要であった。入院1ヵ月半頃よりセルフケアはほぼ自立した。

実践の流れ：

- セルフケアがほぼ自立した時期に、学生が対象者への生活行為の聞き取りを行った（実習指導者同席）。事前に、退院後の生活に焦点を当てて、対象者が本当にしたい生活行為は何かといった視点をもち聞き取りを行うように指導を行った。結果、対象者の要望としては「家族のために文旦の箱詰め作業を手伝いたい」を聴取できた。
- 合意目標設定の際に、学生は課題の抽出・焦点化に難渋していた。そのため、アセスメントシートから各因子の相互作用を考えることを伝えていった。具体的には、心身機能の改善のみならず文旦の仕分けは、環境設定や作業工程の省略、家族の支援が期待できることについて面談を通して一緒に家族へ確認を実施した。また、課題分析シートを用いて、MTDLP介入で改善できることを可視化し課題の整理を一緒に実施したうえで、合意目標を「1ヵ月後に歩行器を使用して10m先にある作業場まで一人で移動し、座位で文旦の選別作業を3時間程度行える」として設定した。
- 介入方針、訓練方法は、文旦の作業内容について対象者および家族に工程を確認した。内容としては、収穫は家族が実施し、コンテナに入った文旦の大小や出荷の選別をする作業であった。そのため、座ってできる作業場の環境の確認と移動の確立、片手で実施可能かなどの確認が必要であることを共有した。実習指導者と学生が考えたプログラムを実習指導者が対象者に実施し、動作の観察、段階付け、修正点などを学生と共有した。
- 退院後の生活についての「したい」「やりたい」生活行為を実現するために訪問リハビリテーションへ退院後の課題としてつなぐ必要性について学生と一緒に考える時間をもった。

実習指導者の準備：

対象者を選択する際には、要望の聴取がスムーズにできるように、日常生活に支障をきたすような、認知機能障害や高次脳機能障害がないこと、日常でのコミュニケーションに問題がない者を調整した。また退院後の生活（特にICFの参加面）に焦点を当てた介入ができるように、病棟でのADL動作がある程度自立した時期から関わりをはじめるように介入時期についても配慮を行った。

実習後の振り返り：

- 実習指導者：退院後の生活に着目しそれを達成するために、病院でできることは何か、達成できないことは地域のどの支援者につなぐかなど、作業療法士がチームのなかでマネジメントすることの重要性について一緒に振り返りを行った。
- 教員：実習終了後、マネジメントシートを活用した症例報告書（レジュメ）を使用して学内での報告会を実施した。その際、評価結果の統合と解釈や合意目標設定の理由、各プログラムのつながりを可視化することで、思考過程を伝える機会をもてるようにしている。

学生コメント

新型コロナウイルス感染症の影響で直接的な介入は制限されていたが、合意目標の達成に向けて実習指導者とともに何が必要かを考えて、その実践課程を見ることができて良かった。特に、課題分析シートの利用は自分の頭の中を整理することに繋がったと思う。

おすすめ度；★★★★★

実習指導者コメント

MTDLPという共通言語を用いることで、対象者の因子の相互作用を考え、評価の統合と解釈ができること、実習指導者と学生の臨床思考過程を可視化できるメリットを考えると、臨床実習におけるMTDLPの活用はおすすめです。

Point!

MTDLPで対象者の因子の相互作用を考慮した評価を可視化でき、臨床実習にはおすすめです。

教員コメント

コロナ禍でさまざまな制約を受けながらの実習ではあったが、MTDLPを用いたことで学生と実習指導者がともに思考を共有しやすくなり、二人三脚で進めたと思う。こういった経験を通して、作業療法の醍醐味や深さに触れることができるのがMTDLPを活用するうえで非常に有意義な点だと感じた。

【実例から学ぶ視点（解説）】

この実例では、まず実習指導者によって退院後の生活行為が焦点となる対象者を対象とする工夫がされています。どの時期の対象者であっても、その時点で焦点となる生活行為について実習することが可能ですが、本来の生活の場に向けた実習が行える工夫がされていました。また、文旦の選別作業という学生には馴染みが少ないと思われる生活行為について、生活行為工程分析を行わせて具体的な生活行為の内容が把握できるように進めています。さらに、実習の振り返りの際に、病院でできることと地域の支援者への引継ぎについて検討し、学生がマネジメントの流れをより把握できるよう指導を進めています。

退院後の施設での下衣更衣の自立を目標に学生が主体的に取り組んだ実例

実習の実施環境：
大学4年生/総合臨床実習/8週間/回復期リハビリテーション病棟

実習の特徴

実習前半4週間は実習指導者が担当している対象者に対し、学生はさまざまな評価や訓練の補助に関わりをもった。主に関わらせて頂く対象者については、生活全般の能力を把握し、同時に評価も行った。対象者は施設入所方向であり、「退院先の施設でできる限り自分のことは自分で行える」ことを目標に、実習後半4週間でMTDLPに基づいた介入を学生とともに行った。前半4週間で学生がOTの助手として関わりがもてることを確認しており、学生と相談しながら進めるような方法を取った。

実習の内容

事例紹介：
対象者は70歳代女性で脊髄炎により両下肢・体幹の筋力低下と感覚障害を持ち、移乗を含めた基本動作が全介助の状態であった。これまでは主に機能回復を中心とした訓練を行っていた。主婦であり、夫と2人暮らしで夫の介護をしていたが、退院後は施設への入所予定となった。自立心が高く、できる限り自分のことは自分で行いたいと話していた。

実践の流れ：
- 対象者と学生の関係は良好だったため、学生が生活行為の聞き取りを行い実習指導者はその場面に同席した。事前にどのように聞き取りを進めると良いかを学生に確認した。聞き取りでは、下衣を自分で着替えたいという事と車いすを使い自分でトイレに行きたいという要望が聞かれた。入院期間あと1か月で達成可能と予測される「ベッド上での下衣着脱」を合意目標として提案した。
- 学生は、対象者がベッド上で下衣着脱を行う様子を観察し、動作の模倣をしてもらった。その上で困難と想定される箇所や工程について実習指導者と学生が一緒になって練習方法を考えた。
- 学生がプラン演習シートを作成する際に、下衣着脱時の環境設定や対象者に気づかせたいポイントなどを実習指導者が学生と確認しながら記載することで、プログラムの設定や対象者に気づかせたい部分などを伝えやすかった。また、実習指導者が対象者と練習している場面で、見学していた学生は、対象者に理解させたいポイントを繰り返し説明していることに気づいた。そして、看護師に更衣場面でのポイントを伝え練習依頼することや、学生が対象者用に更衣マニュアルを作成するまでに至った。

実習指導者の準備：
実習指導者はB県作業療法士会MTDLP推進班員である。
対象者が回復期中期（退院後生活への展開）から後期（退院後生活への適合・調整）への移行時期に相当しており、施設入所に向けた取り組みについてMTDLPを活用し、実習指導者と学生で一緒に考えていけるように調整した。

実習後の振り返り：
実習終了後、大学にて実習後課題（事例報告書）をまとめた。その上で、学生は担当教員と対象者に対して取り組んだ生活行為向上支援について振り返りを行った。

学生コメント

対象者の課題と解決方法を具体的に見つけていくことができた。そして病棟で看護師が毎朝行為の練習に取り組んでもらえることに、チーム全体でのリハビリテーションを実感できた。

おすすめ度；★★★★☆

実習指導者コメント

学生が自分も対象者の援助の一端を担うことができたと自信を持ってもらえたらと思う。今回の実習のように対象者の退院後の生活行為を具体的に考えられるようになることが回復期での臨床実習の目標になるのではないかと思う。

Point! MTDLPで対象者の退院後の生活行為を具体的に考えることで、学生は達成感が期待できます。

教員コメント

実習指導者からは、学生がMTDLPを用いて対象者の生活行為に１スタッフとして参加できるようになっていると聞いた。MTDLPを活用すると対象者の置かれている背景や実習指導者の考え方の理解を深めることができるため、現場参加が促されやすいと思う。

【実例から学ぶ視点（解説）】
この実例では、8週間の実習の中で前半と後半という形で分け、学生に対し段階付けて学べるように配慮がなされています。前半は、実習指導者が行う評価や訓練の補助に関わりをもってもらい。後半は、MTDLPに基づいた介入を学生と実習指導者が一緒に相談しながら進めるところにポイントがあります。
下衣の着脱方法の作業工程分析では、学生が模倣し課題となる箇所を見つけ、実習指導者が一緒になって練習方法を考えるところなど工夫がなされています。学生が更衣マニュアルを作成し、看護師に伝えて実践した場面は、回復期における作業療法士がチームの一員であることを実感できたのではないでしょうか。

領域別の実習実例

高齢期・地域領域

介護老人保健施設で長期入所となった利用者に対して排泄動作能力を高めつつ趣味を楽しめることを目標に展開した実例

実習の実施環境：
大学4年生/総合臨床実習/10週間/介護老人保健施設

実習の特徴

実習１週目に対象者を決め、リハビリテーションの補助として関わってもらいつつ、作業の聞き取りや各種評価を実習指導者と見学・模倣・実施で進めた。同様に生活行為アセスメント演習シート、生活行為向上プラン演習シートも一緒に記入し、学生だけで記入し完成させるのではなく、ある程度実習指導者がヒントを出しながら進め、MTDLPの流れを体験できるようにした。実習後半はMTDLPに沿って訓練プログラムを実施し、効果の振り返りを一緒に行った。主担当対象者だけでなく、サブ担当対象者のMTDLPシート記入も同様に実施した。

実習の内容

事例紹介：
対象者は80代女性。13年前に脳幹出血により左片麻痺となり、当施設のミドルステイや在宅サービス（主に訪問看護・通所リハビリテーション）を利用しながら、夫と息子家族の４人で暮らしていた。徐々にトイレ動作等介助が必要となり、今回長期入所となった。今後は特別養護老人ホーム入所予定。性格は温厚。趣味は絵を描くことであった。

実践の流れ：

- 事前に興味関心チェックシートを実施し、どのようなことに意欲的なのか把握した後に生活行為の聞き取りを実習指導者が同席し学生と実施した。トイレ動作・食事動作・趣味活動など複数の希望があったため、1回の面接で合意目標を決めてしまわないようにその他の評価を実施後に改めて複数の希望から合意目標をつなげるように指導した。
- 評価後、合意目標は「１ヵ月後、トイレ動作や食事動作の介助量を軽減させた上で、趣味である塗り絵等が両手を使って楽しめる」とした。
- 「おとなの塗り絵」（書籍）をキーパーソンへ対象者から依頼した。興味関心も高く、毎日楽しそうに取り組まれている。また事例にとって、塗り絵を通じて家族、利用者、職員との大切なコミュニケーションツールの一つであることが理解できた。
- 実習で特に重要と考えている生活行為向上プラン演習シート・生活行為工程分析とプログラム記入の際には、実習指導者と一緒に今何ができて、何ができないのかを一つずつ考え各プログラムにできないものと維持させねばならないものを組み込んでいった。
- 排泄動作、趣味活動を実施し、最終評価の結果から効果を一緒に確認した。残された課題や目標の再設定を行った。

実習指導者の準備：
実習指導者はMTDLP指導者で、C県作業療法士会のMTDLP推進委員である。
対象者の選定については、長期入所で自宅復帰は困難な事例であったが、性格が温厚で話しやすく、セルフケアの自立だけでなく趣味活動として絵を描くことや塗り絵がやりたいと強い意思を持たれている方であったため、プログラムの拡がりが望めると考え調整し準備した。

実習後の振り返り：
実習終了後、担当教員と各種シートをもとに生活行為向上に向けた支援について整理し、事例報告書としてまとめて発表した。事例報告書は、マネジメントシートを中心に1枚にまとめたものである。

学生コメント

実習開始時より、リハビリテーションの補助として臨床体験を数多く経験した。各シートを繰り返し教えてもらうことで、対象者の方の背景を理解する重要性やプログラムを実施することでの生活への影響、多職種の方と一緒に取り組むことの大切さを臨床で学ぶことができた。

おすすめ度；★★★★★

実習指導者コメント

MTDLPを活用した実習を経験したことで、実施した排泄動作練習や趣味活動などがその対象者の生活にとってどういう影響を与えるかが明確にイメージできたのではないかと思う。できないから実施する、やりたいからやってもらったというのではなく、残された人生どう過ごしていただきたいかを共に考えることの大切さを理解できたのではないかと思う。

教員コメント

実習後、学生は対象者の個人因子・環境因子を踏まえたアプローチの実施の状況について、詳細に説明することができた。特に、実習指導者が各種シートを通じて学生の思考を引き出し、理解を深めることができていた。こうした学生への関わりによって、学生は自信を持って実施・報告できていたと感じた。

Point!
MTDLPを活用し、学生は指導者との対話でより理解が深まり、自信を得たのではないか。

【実例から学ぶ視点（解説）】
生活行為の聞き取りは学生にとって難しいことの一つです。この実例では、興味関心チェックリストを事前に行いそれを参考に準備してから面接する工夫がなされています。さらに、複数の希望が聞き取られたことに対して、評価の後に再度聞き取りを行うという工夫を学生に指導し、合意目標を検討するまでに対象者がこれからの人生をどう過ごしたいかについて向き合う機会と期間を設けています。このような対応を体験してもらうことで、学生はMTDLPが大切にしている対象者を主体とした取り組みを学ぶことができています。

自宅への退所後、ご家族と買い物などの外出機会の獲得に向けて取り組んだ実例

実習の実施環境：
大学4年生/総合臨床実習/8週間/介護老人保健施設（入所）

実習の特徴

学生は総合臨床実習の1期目であり、学生：指導者＝2：1で行った。実習初期（約2週間）は実習指導者の担当する対象者のさまざまな作業療法場面の見学および一部分の評価やプログラムの模倣を実施し、2週目の中盤に対象者を決定した。その後、学生はMTDLPのプロセスに基づいて、検査・測定の見学、模倣、実習指導者から予後予測の解説等の助言、また教員からも確認、指導を受けながら「生活行為アセスメント演習シート」「生活行為向上プラン演習シート」の作成を行い、段階づけた作業療法プログラムを実施した。最終的には、合意目標としたスーパーでの買い物の練習（評価）も行い、現状の課題を整理することができた。

実習の内容

事例紹介：対象者は80歳代女性。夫と2人暮らし。自宅で転倒し右上腕骨近位端骨折術後に脳梗塞を発症し、急性期、回復期を経て老健へ入所。自宅生活時から軽度の認知症を患っており、買い物や料理はなんとか行える状態であったが、入院中に認知症の進行を認めた。夫は平日、会社社長として出勤していたが、勤務調整を行い、自宅退所を希望されていた。対象者のニーズは「家に帰ったら、買い物に行きたい」という内容であった。

実践の流れ：

- 対象者は認知機能の低下により、話されるエピソードが正誤が入り混じった状態であった。学生が対象者から聞き取った情報をご家族、他職種からの情報と照合して環境因子の整理を行なった。学生は、聞き取りで得た「買い物に行く」というニーズに関して、移動能力の課題に目が行きがちであった。そのため、認知機能の低下がどの工程に影響するか、また予後予測などの説明をし、生活行為の工程分析を細かく行った。その内容をもとに「生活行為アセスメント演習シート」「生活行為向上プラン演習シート」を実習指導者と学生とで記入した。合意した目標は、「夫と一緒に歩いて自宅から150m離れたスーパーへ買い物に行く」とした。
- 介入前期は、基本的プログラムでは、筋力訓練を行う際に、対象者は個別で行うよりも集団で行う方が効果的であったため、学生にはその点に着目してもらうように見学してもらった。また、集団で行う筋力訓練の進行役は、早期に学生に任せるようにした。
- 介入中盤～終盤は模擬練習を中心に施設内で練習を重ねた。模擬練習では、商品棚から商品を取って歩く模擬練習、店舗内を想定して施設内で人混みの多い場所を歩く練習、屋外歩行に関しては、自宅の環境に近い住宅街である施設周囲を自宅から店舗へ歩いて行き、買い物をして帰宅するために、どの程度の耐久性があるのか、日々評価しながら練習を実施した。これらを実施するに当たって、想定されるリスクを含めた対象者の状態を予測してもらった。その上で、実習指導者がプログラムを実施する様子を見学してもらった。見学の際は、どのようにリスク管理を行なっていたのか、プログラム中にどのような声かけ、フィードバックを行なっていたのかなどに着目してもらい、気づいた点を挙げ、必要に応じて実習指導者が補足して解説した。プログラムに対して、学生がリスク管理や実習指導者の観察や関わり方のポイントが理解できたことを確認し、模倣、実施に移行した。プログラムの進行に関して、商品棚から商品を取る際の高さなどの段階づけや屋外の歩行距離の変更などに関しては、助言を積極的に行なった。
- 介入終盤に、実習施設の近隣にあるスーパーへ買い物に行くという社会適応プログラムを実施し、実際の店内での動作の評価を行い、夫がどのような場面に配慮して支援をする必要があるかなどの課題整理を行なった。

実習指導者の準備：実習指導者は、MTDLP指導者である。実習指導者は、学生が基本的プログラム、応用的プログラム、社会適応プログラムの一連のプログラムが能動的に行える機会がある対象者の選定を行なった。

実習後の振り返り：実習中から終了後にかけて、大学指定の事例報告書をまとめた。その上で、実習中から担当教員が学生に対してオンライン指導を実施し、MTDLPの一連の流れの整理を行なった。実習指導者が担当教員に対して対象者の概要、経過などについて、オンラインで担当教員から学生への指導前に情報提供を行い、学生と担当教員のやりとりの中で不明瞭な情報について、必要に応じて情報提供を実施した。オンライン指導は、基本的には実習施設において実習時間内に、1回あたり45分程度、合計4回実施した。

学生コメント

考えた内容を生活行為向上アセスメント演習シートとプラン演習シートにまとめることで、実際のアプローチ場面をイメージしやすかった。また、基本的、応用的、社会適応とそれぞれのプログラムを立案することで、苦手な段階付けも行いやすかった。実習指導者にアドバイスをいただきながらMTDLPを活用することで、より作業療法士の思考過程を理解することができた。

おすすめ度；★★★★★

実習指導者コメント

MTDLPは、対象者の希望や家族の希望を学生が把握し、生活状況を確認しながら必要な検査・測定を実習指導者と検討し、プログラムや環境調整、家族指導を実行できる。今回の対象者でも、買い物に行くための目標・課題に対して、例えば「なぜバランスの評価や練習を行うのか」や「認知機能の飛躍的な改善が見込めない場合は、環境調整、夫への指導内容は何が必要か」などを整理しやすく、それらを学生が理解しているかを確認するなど、指導過程が明確となった。つまり、MTDLPは、目標や生活行為の課題に対して、ICFの因果関係を意識しながら、何のために各種検査を行うのか、各種検査の結果を受けて生活行為へどのように影響しているのか、活動・参加面が環境因子とどのように関連しているのかなどの解釈を学生へ尋ねながら指導を行いやすく、その結果、学生の理解度が確認しやすいツールであると考える。

教員コメント

MTDLPを活用することで、対象者の目標に向けた活動・参加への課題を心身機能、住環境、対象者の生活背景、パーソナリティといった関連から抽出し、作業療法支援計画立案が可能となり、トップダウンの思考を学習できていた。その他、リハビリテーションチームにおける自職種の役割を認識し、他職種との連携についても学ぶことができていた。

【実例から学ぶ視点（解説）】

この実例では、学生が基本的プログラム、応用的プログラム、社会適応プログラムの一連のプログラムが能動的に行える機会がある対象者の選定が行われています。買い物に行くというニーズに対し、合意目標を「夫と一緒に」「150m離れたスーパーへ」「歩いていく」という具体的な内容で立てることができており、それに向けたプログラムを学生が経験できています。学生は認知機能低下の予後予測が難しいため、実習指導者が助言しながら、生活行為の工程分析をされています。その結果、学生が作業療法士の思考過程を理解して評価、治療を行うことができています。

施設内の合唱活動から、地域の合唱団としての活動と参加の復帰を目標にした実例
～「唄を地域の人々に届けたい」という対象者の想いと、それに向けた支援～

実習の実施環境：
専門学校4年生/総合臨床実習/8週間/デイサービス

実習の特徴

新型コロナウイルス感染症流行により実習開始時は各種活動も施設内に留めていたが、徐々に活動等の制限が解除され、実習後半では地域での活動も視野に入れて取り組める状況になった。実習で主となるデイサービスだけでなく、併設のサービス付き高齢者向け住宅（以下、サ高住）での生活も含めて、地域での暮らしに根差した活動等を実習の中で経験できる場であった。

実習の内容

事例紹介：

長年学校教員を勤め、病前は保育園の園長をされていた70歳代女性。病前より歌を通した活動に精力的で、地域の合唱団の一員として島唄などの伝承を地域の人々に広めたいとの想いが強くあった。認知症の夫と併設のサ高住で暮らしていたが、脳血管障害を発症。左片麻痺、重度感覚障害、左半側空間無視、注意障害があった。日常生活は車椅子座位で、食事・整容などは自立。トイレ・入浴は中等度の介助が必要だった。これまでは、夫と一緒に散歩がしたいと、デイサービスでは理学療法士による歩行練習が中心であった。デイサービスでは、希望者で結成された「生きがい合唱団」として、レクリエーションで唄を披露していた。

実践の流れ：

- 学生は、実践に際して対象者の生活歴や個人因子・環境因子等の情報収集を行い、インテークから開始した。適宜、実習経過の中で実習指導者へ確認と助言を受けながら、その後の各プロセス（アセスメント、合意目標の設定およびプランニング、実行までの一部）を実践し、振り返りも兼ねて生活行為申し送り表の作成も行った。
- 生活行為聞き取りシートの作成では、対象者自ら明確かつ具体的な生活行為が語られたため、学生自身が実施した。また、インテークを通して、対象者の歌うことの活動に対する想いやその人らしさを知ることができ、その後の実践での良好な関係性を築くきっかけにもなった。
- 生活行為アセスメント演習シートの作成では、主にデイサービスでの過ごし方や動作の観察・評価を行い、レクリエーションでの合唱については、対象者固有の活動と参加の側面として実際の場面をみて評価した。
- プランニングおよび達成のためのプログラムの実行では、施設内での実践だけでなく、地域のイベントに実際に学生も同伴し、対象者と支援者を含めて地域の中で生活行為を支援することを体験共有した。
- 実習最終時には、これまでの振り返りをかねて対象者の生活行為向上のために、関連職種や支援者に生活行為申し送り表を作成して情報提供を行った。

実習指導者の準備：

実習指導者はMTDLP指導者である。施設内の各種調整だけでなく、地域活動のイベントに学生を同伴させ、他のMTDLP指導者との交流の機会を作り、地域の社会資源や支援者とのつながりを多職種協働の場面で学生と接点がもてるよう紹介するなどの準備をした。

実習後の振り返り：

生活行為向上マネジメントシートを中心に、実習最終時に実習地で事例発表を行い、実習中に作成済みであったレジュメをもとに、学校にて事例報告を行った。レジュメの書式等について学校からの指定はないが、実習で学んだ臨床思考過程を各種シートを使用してまとめられる点で効率的であった。

学生コメント

対象者とその生活行為に関わりながら、施設内から地域へと支援の輪が広がっていくことや、実際に地域と繋がっていくことが実感できた。学生としてもやりがいを実感でき、実習が常に面白かった。対象者の個人因子と活動、環境等の結びつきなどに関する意見交換を指導者とすることで、作業療法そのものを理解するのにとても有効だったと感じている。

おすすめ度；★★★★★

実習指導者コメント

学生が対象者のアセスメントを進める上で、答えはないこと、悩み続けて良いことを共有した。対象者と学生も納得いく具体的な生活行為目標を立てることができ、多くの人の支えを得て、生活行為目標を達成できた。学生は対象者らしさを踏まえて支援を悩み続けたことで苦労した分、大きな達成感や自信につながったと思う。

Point!

MTDLP活用で学生は、試行錯誤しながら対象者を目標達成へ導き、達成感と自信が得られた。

教員コメント

学生にとって、対象者の重要な意味のある作業に焦点をあて、その一連のプロセスを実習で経験できたことは、OTの専門性を含めた楽しさや醍醐味も実感できる貴重な時間になったと思う。深い理解と地域や社会資源を含めた支援の実践が連動したことで、臨床参加においてやりがいを伴う好循環を生んだのだと思う。

【実例から学ぶ視点（解説）】

この実例では、活動が施設内にとどまらず、地域へと拡大しています。それに伴い学生も地域の中で支援していく一員に加わることができるよう、地域のイベントに同伴させるなどの工夫がされています。実際に活動の場へ足を運んだことにより、プランニングをする上で、地域の社会資源も含めたマネジメントの視点を持つ機会になっており大変参考になります。また、学生自身が行ってきた取り組みを振り返る目的としても生活行為向上申し送り表を活用している点も参考になります。

漠然としていた“やりたいこと”を具体化して対象者との協業に取り組んだ実例

実習の実施環境：
専門学校4年生/総合臨床実習/7週間（6W＋1W報告会）/通所リハビリテーション

実習の特徴

実習では、“やりたいこと”を見出せずに不活発な自宅生活を続けるデイケア利用者を担当し、実習開始時よりMTDLPを活用した。学生は、実習指導者の指導のもとで、対象者の以前の趣味である“カメラでの写真撮影”ができるように、段階的に合意目標を設定しながらMTDLPの一連の過程と対象者との協業を経験した。

実習の内容

事例紹介：
Ａ氏は、脳出血による右片麻痺を呈する60代の男性であった。発症から２年間が経過し、デイケアを利用しながら自宅で妻と長男と暮らしていた。移動では4点杖と車椅子を併用し、軽度の運動性失語症以外の高次脳機能障害はなかった。発症前は多くの趣味を楽しんでいたが、発症後は何かをしたい気持ちはあるが「もうできない」と発言することがあった。妻も自宅で臥床しがちなＡ氏を心配していた。

実践の流れ：
- “やりたいこと”を見出せないＡ氏に対して、聞き取りを行うことから始めた。学生は、実習指導者の助言を受け、デイルームで過ごす時間を使い、日常会話を交えながら数回に分けて聞き取りを行った。併せて、興味関心チェックリストを使い、A氏の生活行為への思いや行い方を丁寧に掘り下げて尋ねていった。その結果、Ａ氏から「カメラでの写真撮影を行いたい」という思いを聞き取ることができた。
- 演習シートの作成段階では、A氏が写真撮影についての思いを述べたものの、自信がなく、ためらっていることが見出された。そこで、学生は実習指導者やA氏と話し合い、Ａ氏が成功体験を得られるように、“カメラの操作”という遂行面に限定した合意目標から開始することにした。
- 介入では、目標達成に向け、学生とＡ氏が操作方法を話し合いながら、より操作し易い方法を見つけていった。目標の達成に近づき次の目標を検討する段階になると、学生は実習指導者から、Ａ氏の作業歴を踏まえて、Ａ氏が写真撮影を楽しみながら習慣化できる方法を考える必要があることを助言された。実習指導者の支援を受けながら学生とＡ氏が話し合い、最終的に“（デイケアの誕生会で使用する）誕生カード用の写真を撮る”という役割を担うことを新たな合意目標にして臨床実習を終えた。

実習指導者の準備：
実習指導者は、MTDLP実践者研修を修了した。実習指導者は、生活行為の聞き取り方や興味関心チェックリストの使い方の事前説明に加え、Ａ氏の負担とならない聞き取り方や場面設定の助言をした。さらに、“やりたいこと”が見出せないＡ氏には、時間をかけて聞き取りをしても良いことを学生に伝えた。この他、生活行為の支援では、A氏の人となりを理解しながら進める必要があることを繰り返し強調した。

実習後の振り返り：
実習終了後、サマリーシートにまとめ、学内報告会でMTDLPを経験していない学生とともに、対象者に対する取り組みを共有した。

学生コメント

演習シートがあったので、プログラム立案まで、どのような情報を収集し、何を検討する必要があるのかが分かり易かった。

おすすめ度；★★★★★

実習指導者コメント

MTDLPによってICFの項目を関連づけながら考えることができ、何のために身体機能評価や生活歴の聴取をするかの理解を深めやすいと思う。

Point!
MTDLPはICF項目を整理し、身体機能評価や生活歴の理解を促進し、目的を明確化します。

教員コメント

生活行為への介入は、考えることや収集する情報が多くMTDLP活用前は消化不良を起こす学生もいた。MTDLPにより、情報整理やOT過程のどの段階にいるかの理解をし易くなると思う。

【実例から学ぶ視点（解説）】
MTDLPの指導を通じて、学生に対しその人を理解していくよう指導をすすめています。この対象者は、意欲が高く自分のやりたいことがはっきりとしていませんでした。いわゆる通所リハや通所介護で多くみかける利用者に対してのMTDLPを実習指導者と学生が行ったことは、学生のこれからの経験に生かせる取り組みでした。臨床業務で聞き取りに時間を取るのが難しい実習指導者が聞き取りの設定や重要性を学生に伝えることで、学生は具体的な生活行為の内容をとらえる事につながっています。

断念していた日本舞踊講師としての活動再開に向けて取り組んだ実例

実習の実施環境：
専門学校3年生/総合臨床実習/8週間/通所リハビリテーション

実習の特徴

3年制の専門学校の最終学年で行われる総合臨床実習では『MTDLPマネジメントシート』の作成を実習課題として取り入れている。『MTDLPマネジメントシート』を用いることで対象者にとって重要な生活行為に焦点を当てた聞き取りやアセスメントが行えた。

実習の内容

事例紹介：
対象者は60歳代の女性で、5年前に橋出血を発症。回復期リハビリテーション病院から自宅へ退院し、現在は通所リハビリテーションを利用している。ブルンストローム・ステージは上肢Ⅴ/手指Ⅴ/下肢Ⅳ。T字杖歩行は自立しているがふらつきあり。自宅では夫と協力して家事を実施している。以前は日本舞踊の講師として子供に教えていたが、発症後は自身が躍ることはなく、発表会を見学するだけとなっていた。面接では「夫の負担を軽減するため料理をしたい。また日本舞踊を踊りたい。」と話していた。

実践の流れ：
- 実習初期に『生活行為聞き取りシート』を用いて面接を実施した。料理や日本舞踊などの希望があったが、立位バランスの不安定性や左上肢の振戦により家族に止められていた。対象者は『日本舞踊の動きが出来ればいい』という段階ではなく『表現者』として踊りを披露することを望んでいたが、そのレベルへ到達するための手立てが見えなかったことから踊りを諦めていた。
- 対象者の『表現者として日本舞踏を踊りたい』という希望をもとに『MTDLPマネジメントシート』をまとめ、実習指導者と情報を共有した。具体的に『表現者』として必要な姿勢保持やしなやかな手の動きの獲得までのプランを明確にし、対象者と目標を共有した。
- 生活行為向上プランの実施過程で、対象者が日本舞踊を知らない学生に手ほどきをすることで、具体的に求められる動作を段階付けて練習した。また対象者と学生が練習方法のアイデアを互いに出し合うこともできた。最終的に、通所リハビリテーションの敬老会で日本舞踊を踊ることを目標に、他職種や他利用者を巻き込んだ取り組みが行えた。発表会では、杖を使わず、美しい所作や瞬間的に停止するなどの動作が獲得でき、日常生活場面では夫との家事能力改善に般化できた。

実習指導者の準備：
学生と一緒に考えながらすすめることが出来たため、多くの準備は必要としなかった。対象者と学生が良好な関係を築けるよう、導入前の説明や紹介を実施した。生活の中で意味のある作業とは何かをシートを活用しながら助言をした。

実習後の振り返り：
実習課題としてMTDLPマネジメントシートを作成し、学内にて報告会を行った。

学生コメント

対象者の目標に基づいて強みや問題点をICFに沿って列挙することで、アセスメントの方向性を整理できた。また、合意目標を達成するためのプログラムを様々な視点で分類し、介入のバランスを可視化できた。

おすすめ度；★★★★★

実習指導者コメント

実習生にとっても自然と対象者の生活に関心を持つきっかけとなり、生活行為に焦点を当てたディスカッションができた。生活期において、より具体的に生活に寄り添う目標設定をともに考えられた。

Point!
学生はMTDLPで対象者の生活に関心を持ち、生活行為に焦点を当てた目標設定を支援できた。

教員コメント

「日本舞踊」は学生にとって未経験の作業であったが、MTDLPを用いて面接・アセスメントをしたことで、学生-対象者-実習指導者間での情報共有が明確になった。また、学生が対象者から指南を受けることで対象者自身の気づきにもつながり、具体的な目標設定や治療プログラムの段階付けに繋がったと考える。

【実例から学ぶ視点（解説）】
この実例の特徴は、対象者にとって『意味のある生活行為』である日本舞踏に焦点を当てて評価、治療計画が立案されている点です。また、単に踊ることではなく、「表現者として踊りたい」という対象者の希望から目をそらさず、実習指導者と共に作業工程を分析し、表現者としての踊りに必要な姿勢や上肢の動きまで作業活動を細分化して治療計画が立案されています。プロの舞踏講師である対象者の意見を聞きながら、段階づけを行ったプロセスは、対象者と作業療法学生とのパートナーシップの構築にも良い影響をおよぼしたと考えられます。

施設が地域で果たす役割や地域作業療法の役割を経験した地域領域実習

実習の実施環境：
専門学校4年生/地域領域実習/2週間/介護老人保健施設

実習の特徴

本実習は総合臨床実習を履修済みの4年生を対象としており、通所リハビリテーションまたは訪問リハビリテーション利用者に対するプログラムを理解するとともに、その方たちの在宅生活の状況や生活行為について実習し理解することも目的としている。また、施設内での作業療法士の役割と多職種連携について知ることも実習の課題である。

今回、MTDLPを用いて、通所リハビリテーション利用者について普段行われているプログラムに沿いながら社会適応プログラムまでOT助手として関わり、上記の実習目標に向けて実習が行われた。

実習の内容

事例紹介：

対象者は90代前半男性A氏で既往症は脊柱管狭窄症や大動脈弁閉鎖不全症、前立腺肥大があり、要介護４で通所リハビリテーションを週3回利用している。妻と娘との3人生活で妻は認知症だが、娘が両親を介護している。自宅から歩行可能な生活範囲に当施設と図書館がある。対象者の楽しみは幅広いジャンルの読書である。

実践の流れ：

- 学生は、介護保険で利用している他のサービスの状況について施設併設の居宅介護支援事業所のケアマネジャーから情報収集を行い、ご家族の状況や支援経過についても知ることができた。
- 通所で複数のリハビリテーションスタッフや介護士が関わる個別・集団プログラムに参加しながら、A氏について見学し、模倣にて基本的プログラムで下肢の浮腫の軽減、下肢の関節可動域訓練、腰痛緩和のためのホットパック、応用的プログラムで自宅から図書館までの距離を想定した歩行練習などを経験した。学生は実施前にA氏との会話から性格や生活史を把握し、関係づくりを行った。その上で「趣味である読書を続けるために図書館まで転倒せずに安全に行くことができる」を合意目標としてプランニングまで進めた。
- さらに社会適応プログラムとして、送迎の際にリハビリテーションスタッフとともに施設から自宅まで歩行器歩行を行った。また、自宅から図書館までの環境について、対象者は不在だったが実習指導者と道路状況や歩行器歩行について評価した。
- 1週目の後半に、部門内でＡ氏の事例検討会が開かれ、学生はその時点までにまとめたアセスメント内容を報告し、それに対してリハビリテーションスタッフ一人一人がアプローチに関するアイデアを一言ずつ出して検討し合い、多くの見方が得られて理解が深まる機会となった。

実習指導者の準備：

実習指導者の声かけで、事前に部門内で実習前ミーティングが開かれ、学生にどんな内容を経験させたいかを話し合い、周知した。また、webで学生と実習指導者と教員をつなぐ臨床実習支援システムを使用する準備が行われた。デイリーノートには、実習指導者の他にその日に実習指導をしたスタッフもコメントを記載したため、学生と実習指導者やスタッフのコミュニケーションが促進された。

学生コメント

現在の在宅生活を継続するには、通所リハビリテーションの様子に加えてケアマネジャーや娘さんからの情報収集をこまめに行って変化がないか把握する必要があった。また、今回、段差や砂利道などの評価が行えなかったことや、息切れに対して休息をとる指導も必要だったことは今後の課題である。

おすすめ度；★★★★★

実習指導者コメント

まず、A氏を通して多職種連携や暮らしの環境との関わりを体験してもらい、そこから発展させて施設の特色や地域における作業療法士の役割を伝えた。お互いを結びつけながら理解してもらえたと思う。
A氏の他にも多くの対象者に関わってもらった。その際には、例え部分的な関わりであっても取り組み全体をイメージしやすいように各対象者のMTDLPシートを介して学生に説明した。実習前の打ち合わせで各スタッフにシートの作成を依頼しておくことで、この様な取り組みが可能となった。

教員コメント

対象者の全体像や対象者にとっての合意目標の意味を、MTDLPシートを通して理解を深めることができていた。また、実習目標である施設が地域で果たしている役割やそこでの作業療法士の役割を理解することをよく意識して取り組んでいた。

実習支援システムの導入により、教員はリアルタイムで実習状況を把握することができた。学生の記載する質問が現場での判断や方針の考え方といった内容に変わっていき、それによって教員は成長を実感することができた。

【実例から学ぶ視点（解説）】

実習開始前に、部門内で「学生にどんな実習経験をしてほしいか」という実習目標をスタッフ間で共有し、学生が地域作業療法の役割を理解できるような環境を整えていました。具体的には、実習1週目の後半に、学生の対象者のアセスメント報告に対して、スタッフがアプローチに関するアイデアを出し合い、学生と共に考えるという工夫がされていました。

また、多くのスタッフが各対象者のMTDLPシートを作成することで、学生が多くの作業療法士の臨床思考を理解できるようになっていました。加えて、ケアマネジャーからの情報収集や地域生活の環境アセスメントなども指導されています。これらの工夫によって、学生は施設が地域で果たす役割や地域作業療法の役割を理解することができたと感じられます。

日中デイケアに通いながら在宅生活維持を目標とした重度認知症者へ関わった実例

実習の実施環境：
専門学校3年生/総合臨床実習/8週間/重度認知症デイケア

実習の特徴

同じ学校から2名の学生が実習に来ており、相談しながら進められるようにした。また、評価期間として前半4週間は担当対象者との関わりを多くもってもらった。対象者は週2回の通所のため、通所されない日は多くの認知症の方々と関わってもらい様々な経験をしてもらった。

後半4週間の治療介入では、週２回の治療プログラムを学生２名が中心となって実施してもらった。その他の曜日は実習指導者が立てたプログラムを学生に実施・補助をしてもらった。

実習指導者のプログラムに関しても学生が自主的に動けるようになり、利用者の対応をしてくれたため実習中はより良い医療が利用者に提供出来ていた。学生同士で悩みなどを相談できるような体制をとり、困った際に実習指導者が作成したMTDLPシートを見せながら指導を行った。

実習の内容

事例紹介：

80代女性で重度のアルツハイマー型認知症からくる不安症状により、息子が不在の日中は生活に支障をきたしていた。人と話すことが大好きで「寂しいから話し相手がほしい」と話していた。キーパーソンである息子は「出来るだけ長く自宅で面倒を見たい」と話していた。

実践の流れ：

- 他利用者と違うことをしたがらない方だったため、生活行為目標の聞き取りを実施する際にはホール内の対象者の自席へ赴き、日常会話に折りまぜながら情報を収集した。
- 学生と実習指導者、精神保健福祉士で協力し、息子からの情報、他利用施設での様子などを聴取した。
- 生活行為課題分析シートは学生と実習指導者で情報を整理しながら進め、適宜対象者に確認をとりながら完成させた。
- 対象者が人と話すことを求めていたため、うた会やカルタなどの集団活動をプランに組み込んだ。また、重度認知症であるためBPSDの軽減や予防、見当識の維持を目的としてリアリティ・オリエンテーションや、季節の塗り絵などを実施した。
- これらの介入プログラムは実習生２名で相談したうえで、実習指導者からのアドバイス（利用者選定や座席配置、選曲、難易度設定など）やフィードバックを基に修正しながら学生が主体となって実施した。

実習指導者の準備：

実習指導者はMTDLP基礎研修を受講済みで職場の後輩指導でMTDLPを活用している。今回の学生指導で初めてMTDLPを活用した。実習前には学生が担当する対象者をMTDLPでまとめ上司に確認してもらっていた。実習中にはフィードバックやアドバイスをする際に実習指導者が作成したシートを活用した。学生はMTDLPの理解度も高くスムーズに進めることが出来た。

実習後の振り返り：実習終了後、学校の課題である事例報告書（レジュメ：A3用紙１枚）にまとめた。レジュメには生活行為向上マネジメントシートを別で提出し担当教員とのグループ報告会やゼミ活動を実施した。

学生コメント

対象者の課題や全体像が分かりやすくなり、プランもたてやすかった。同級生と相談しながら進めることでやりやすかった。また、実習指導者の作成した各シートを見せてもらえたので理解がしやすかった。実習を通してチーム全体で対象者を支えていることが実感できた。

おすすめ度；★★★★★

実習指導者コメント

課題分析シートを活用し対象者の困りごとや課題を明確にすることが出来たが、認知症の対象者には当てはまらない項目が多く記載で困ることもあった。デイケアにいる間のことだけではなく、自宅での生活を考えることなど、地域にいる対象者に評価から治療の過程を経験する機会となったと思う。作業療法士になってからも、自宅生活を踏まえた関わりができれば良いのではないかと思う。

MTDLPを活用することで、これまで難しいと感じていた臨床推論を共有しやすくなった。今後もMTDLPを活用していきたい！

教員コメント

講義で学んだMTDLPを実際の臨床で、アドバイスをもらいながら実践したこと、学生同士で相談しながら介入が行えたことは卒後の臨床で活用していく一助になると感じた。また、臨床現場で学生自身が考えながら動き、実習期間中はより良い医療が提供できたと伺いスタッフの一員として実習を進めていただけたと感じた。

【実例から学ぶ視点（解説）】

初めてのMTDLPを活用した実習指導でしたが、実習指導者自身が作成したMTDLPシートを見せることや、実習生同士で相談できる体制作りによって、円滑に実習が進んでいます。具体的には、通所施設の対象者に対して、通所中以外の情報を多職種から聞き取ることで、より包括的なアセスメントを行うことができているようです。また、生活行為課題分析シートを活用して情報を整理することで、課題の特定と目標設定がスムーズに行えるようになっています。

重度の片麻痺を呈した入所者が学生とともに楽しめる活動に取り組むことで生活が豊かになっていった実例

実習の実施環境：
専門学校4年生/総合臨床実習/7週間/介護老人保健施設

実習の特徴

実習開始1週間は施設の特徴、入所及び通所利用者の特徴について知り、実習指導者が担当している対象者の訓練の補助に関わったり、それらの対象者について学生とフィードックを重ね、生活をみる視点が養えるようにポイントを当てて実習を進めていった。2週目から対象者を担当し、MTDLPを使用して評価を行っていった。他職種からの情報や、ケアプランをしっかりと把握したうえで、対象者に生活行為を聞き取り、合意した目標を設定することができ、その目標に向かって作業療法を進めていった。

実習の内容

事例紹介：
対象者は90代の男性で重度の右片麻痺を呈しており、移乗は介助が必要であったが、自己検討能力の低下もあり、一人でトイレに行こうとして転倒したことがあった。家に帰りたいという希望はあるものの、食事以外のADLはほぼ介助が必要で、独居という環境もあり、自宅に帰ることは困難であった。

実践の流れ：
- 実習指導者が対象者と行っているリハビリテーションの場面を見学、模倣してもらうことと並行して、学生の評価を実習指導者と一緒に行っていった。
- 合意目標については、学生と事前に打ち合わせをし、達成可能と推測される段階を確認した後に、インテークの段階での生活行為の目標を聴取してもらうようにした。聞き取った目標「右手が使えるようになりたい」→合意目標「今より右手が動くようになる。（塗り絵以外にも楽しめる活動がみつかる）」
- 麻痺側を含む身体機能面の向上を目的とした訓練に加えて、趣味活動につながる作業を取り入れてアプローチをしていくことが重要である旨を説明し、学生がその内容について主体的に考えることができるように配慮した。結果、プログラムとして、麻痺側の反復促通法等の機能訓練、学生と一緒に行うちぎり絵等を行っていくことができた。
- 合意目標以外でもADLのちょっとした場面で困っている生活行為（歯ブラシのキャップをうまく開けられない。）に着眼し、片手でもできる方法を考えて練習し、少しでも自分でできるADLを増やしていくことができた。

実習指導者の準備：
実習指導者は、C県作業療法士会のMTDLP班員である。実習指導者は生活行為課題分析シートも活用し、予後予測や課題の重要性等のポイントを学生と一緒に確認しながらマネジメントを進めていった。ケアプランについてもポイントを確認し、他職種とのアポイントをとって上手く情報収集ができるように設定していった。

実習後の振り返り：
実習終了後、作成したMTDLPの事例報告書を用いて発表を行った。その後グループに分かれ、足りない所や、違った視点の提案などのディスカッションを行った。

学生コメント

MTDLPシートを使用することで、対象者の全体が把握しやすく、何を考えなければならないのか明確になったおかげでスムーズに評価や考察を進める事が出来た。

おすすめ度；★★★★☆

実習指導者コメント

自宅に帰れない対象者は多いが、施設の中での生活であっても、いつも“本人の望む暮らし”に寄り添い、“具体的な生活行為の向上”を提供することが作業療法の専門性であるということが、MTDLPを活用することで、理解することができたと思う。

Point!

MTDLPを活用することで、これまで難しいと感じていた臨床推論を共有しやすくなった。今後もMTDLPを活用していきたい！

教員コメント

実習終了後、クラス全員で発表を行う中、合意目標を立てる際の対象者の考えや思いを共有することの大切さがわかったといった意見が聞かれるなど対象者を通じた学生同士で共通認識を持つことが出来た。

【実例から学ぶ視点（解説）】
この実例では、まず実習指導者によって開始直後の1週間を利用し、学生とのフィードバックを通して“生活をみる”という重要な視点を育むことに努めています。また、対象者は90代で自宅復帰困難という一見するとMTDLPの導入が難しいと思われがちな方ですが、他職種との密な情報共有や学生が見慣れていないケアプランのポイントを伝えることで、多職種連携やマネジメントの流れを理解できるように配慮した指導となっています。さらに、身体機能面と活動・参加のつながり（趣味活動）や作業手順の変更などICFの視点に基づき、MTDLPにとって欠かせないポイントをより実践的に指導されています。

領域別の実習実例

精神科領域

統合失調症と福祉就労
ー就労支援を経験できた実例ー

実習の実施環境：
専門学校3年生/総合臨床実習/11週間/精神科デイケア

実習の特徴

精神分野での実習は初めての経験であったため、学生は不安を感じていた。しかし、実習指導者の働きかけや対象者との交流を通し精神科に対するネガティブなイメージが軽減し精神分野に関する興味関心が非常に高まった。実習指導者との信頼関係も早期の段階で構築でき、見学・模倣・実施の流れに沿った学びにより、知識レベル、技能レベルともに実習中に向上がみられた。開始2週間は見学を重視し、3週目より対象者の評価を開始し、9週目より実習指導者と共に治療プログラムの一部を実施した。

実習の内容

事例紹介：
統合失調症を呈した40代の男性である。仕事は続かず人間関係も衝突することが多く、職場を転々としていた。30代の時に被害妄想や独語が目立つようになり、衝動的な行動がみられ警察に保護される。入院治療で陽性症状は軽減し、退院となり現在は両親との3人暮らしを継続していた。デイケアを週5回利用しながら、就労支援A型事業所への移行を目指していた。

実践の流れ：
- 対象者・実習指導者・学生の協働関係に重点をおき、「働く」ことに対する想いやモチベーションに注目し目標立案を行った。目標設定のための面接では、初回は見学レベルから実施し、最終的には学生主体の半構造化面接の実施レベルまで到達した。学生が日常会話を交えながら対象者と交流を深める中で、良好な関係を構築することができた。観察評価、PANSSやLASMIの評価スケール、聞き取りを行い、多角的な視点で捉えられる様に実習を進行した。課題分析を行う中で、話しかけるタイミングが分からないこと、相手の気持ちを汲み取れず思ったことを発言してしまうこと、社会認知を要する複雑な対人関係が特に苦手であり、ストレスを溜めやすく対処法も未修得であることが分かった。就労を目指す中で課題となる点、その要因を実習指導者、学生、対象者の三者で共有し、共通認識のもと合意目標を形成した。合意目標は「適切な援助が受けられる様、困った時に相談できるようになる」「就労支援や仕事について調べたり学ぶ機会をもち、就労を目指す」とした。基本的プログラムは基礎体力作りや週間スケジュールの作成、応用的プログラムは心理教育やクライシスプラン・就労パスポートの作成・職業疑似訓練を実施、社会適応プログラムでは事業所見学やハローワークと協働したジョブガイダンス、個別相談に学生も同行し参加した。実行度は2/10→7/10、満足度は2/10→6へと変化がみられた。

実習指導者の準備：
初めての精神科実習のため、実習初期はまず病院の流れや雰囲気に慣れることを重視した。また、他校の実習生との交流場面も積極的に設け、安心できる環境作りを行った。観察評価だけでなく、評価スケールも積極的に活用し、学生が学内で学んだ評価方法を実践できる場を設けた。会議や面談、就労に関する治療プログラムがあった際には学生に積極的に見学、模倣、実施に参加してもらうようにし、作業療法参加型実習を意識して行った。

実習後の振り返り：
事例報告書をまとめ、下級生も参加した形で学内発表を行った。実習課題として、生活行為アセスメント演習シート、生活行為向上プラン演習シートに加え、A4用紙1枚に、対象者情報・評価内容の要約・統合と解釈を記載する形とした。

学生コメント

作業療法をどのような目的で行っているかを考えて治療プログラムを立案できる様になった。MTDLP を使用することで、現状の能力と問題点だけではなく、予後予測の視点を学び練習する機会となった。予後予測を考慮したプログラム立案をすることができるため、阻害要因と強みが明確になり、プログラムを具体的に書くことができた。また、職種ごとの役割を書くことで治療の流れが理解でき、多職種で共同して治療を進める必要性をより感じた。

おすすめ度；★★★★☆

実習指導者コメント

対象者の作業に焦点が当たり、目標設定や計画立案においての思考過程が共有できた。そのため、CCS方式の実践と対象者・学生間との協働関係が形成されやすいと感じた。また、アセスメント演習シートや課題分析シートを用いることで、学生の理解度や苦手な部分が視覚的に把握しやすく、学生と議論できるツールにもなり得る。

Point!
MTDLPは作業に焦点を当て、目標設定・計画立案の思考過程を共有・協働を促進し、理解度を把握し、学生とのコミュニケーションを促進する。

教員コメント

学生が治療者の一員として参加させていただき、福祉的就労を目指す一連の過程や様々な制度を学ぶ貴重な機会となった。精神科での実習に不安を感じていた学生が、MTDLPを用いた作業療法参加型実習を経験したことで、精神科に対するイメージが大きく変わり、作業療法士の役割をより感じることができた。学内で学習したことと臨床場面の患者像とを結びつけることができ、作業療法士としての役割や責任感も感じる、学生にとって学びの深い実習となった。

【実例から学ぶ視点（解説）】
- 観察評価や評価スケールの結果、他部門からの情報を生活行為アセスメント演習シートに落とし込んだことで、学生が阻害要因と強みを把握することができ、統合と解釈がしやすくなっています。
- 就労に向けての課題を実習指導者、学生、対象者の3者で合意目標を設定しており、達成可能な現実的な目標設定をすることが出来ています。実習指導者が予後予測を学生に助言しながら作成されたため、学生がプログラム立案をしやすくなっていました。

精神科デイケアで
再就労に向けた準備に関われた実例

実習の実施環境：
大学3年生/臨床評価実習／６週間／精神科デイケア

実習の特徴

学生にとっては初めての精神科実習であった。実習開始１週目はデイケアに慣れることを目標とし、２週目以降にMTDLPを用いた実習指導を開始した。MTDLPプロセスに沿って、実習指導者と学生が二人三脚で進めながら取り組んだ。評価実習であったことから、事例登録用の一般情報シート、生活行為向上シートを用いて情報収集から生活行為向上プラン立案までを実施した。

実習の内容

事例紹介：
対象者は持続性気分障害の診断を受けた20歳代前半の男性である。上司からの叱責が原因で退職し、その後数年間ひきこもっていたが、再就労を目標にワークレディネス(就労準備)コースがある精神科デイケアに2年間通所していた。対象者はコミュニケーションが苦手であったが、デイケア通所を通して集団内でリーダー的役割を担えるようになってきた。対象者が希望する再就労に向けて本格的な準備を始める目的でMTDLPを導入した。

実践の流れ：
- 実習前に、実習指導者が生活行為の聞き取り面接を実施していた。対象者は「楽な気分で働けるようになりたい」、母は「早く働いてほしい」と希望した。聞き取り結果を学生に伝え、学生は生活行為向上マネジメントシート（生活行為目標）に記載した。
- 学生は、対象者と母の希望を基に評価計画を立案し、実習指導者のフィードバックを受けてから情報収集を行い、一般情報シートに記載した。また対象者の観察評価を行い、評価結果を生活行為向上マネジメントシート（生活行為アセスメント）に記載した。
- 目標の合意形成のための面接に学生が同席し、実習指導者と対象者が合意形成に至るプロセスを見学した。合意形成した目標は「生活リズムを整えられるようになる」で、実行度は3点、満足度は2点であった。
- 実習指導者は学生に生活行為の予後予測と生活行為工程分析を説明し、実習指導者と学生が共に工程分析の一部を行った。
- 学生が生活行為向上プログラムを立案した。実習指導者がプログラム立案に関する臨床思考を伝え、学生が臨床思考を模倣してプログラムを修正した。

実習指導者の準備：
実習指導者は、実践者研修修了者であった。またMTDLPを用いた精神科事例の学会発表や実習指導経験を有していた。学生にとって初めての精神科実習であったため対象者の選定を慎重に行った。具体的には疎通性の障害が少なく、目標が明確な対象者とした。

実習後の振り返り：
実習先で一般情報シート、生活行為向上マネジメントシートを作成していたので、教員のフィードバックが円滑に行えた。教員は、聞き取り内容から合意形成のプロセスを経て、具体的な生活行為目標に落とし込めた点を評価した。実習報告会に向けて、大学指定の様式でレジュメを作成する必要があったが、すでに生活行為向上マネジメントシートを作成していたためICFモデルを容易に記載できた。報告会では、対象者の希望する生活行為に基づいたトップダウン思考で発表できた。

学生コメント

比較的短時間で目標設定できたので対象者の負担を最小化できると思った。またシートがあるので自分の考えを説明しやすかった。一方、持続性気分障害という特性を踏まえると明確な目標を示すことで対象者が焦ってしまわないか不安に思う点もあった。

おすすめ度；★★★★☆

実習指導者コメント

学生は現在の症状や障害を評価することはできても、過去や未来を想像して評価する視点が持ちづらい。MTDLPを使うことで、過去・現在・未来にわたる対象者の人生の物語やその人にとっての大切な作業を学生に教えることができる。学生が実施するのが難しい工程は実習指導者が行うのを見学してもらうとよい。

Point!
MTDLPで学生に過去・現在・未来の視点と作業の大切さを教える。見学で難しい工程を学生に理解させる。

教員コメント

学生は、既存のプログラムに参加することで「作業療法が出来ている」と錯覚しがちだが、MTDLPを用いることで生活行為に焦点を当てたプログラム立案の必要性を理解することができる。学生に生じた臨床疑問について、精神科ならではの工夫や配慮について説明することで臨床思考を教育する機会にもなる。

【実例から学ぶ視点（解説）】
この実例では、初めての精神科の評価実習ということもあり、実習指導者が対象者の選定や事前に実施していた聞き取り面接の結果を学生に伝えることで、生活行為に基づき評価計画の立案が行えるように配慮されています。また、再就労に向けた準備段階という点を考慮し、学生が合意形成までのプロセスを見学することで、この合意目標が将来にある就労にどうつながっていくか理解できるように努めています。さらに、予後予測や工程分析は実習指導者が一緒に実施し、プログラム立案に関しては一度、学生が考えたものに対して実習指導者の臨床思考をフィードバックすることで、学生自身に気づきが得られるよう指導を進めています。

社会への第一歩
～発達障害と統合失調症の若者が障害者雇用を目指す実例～

実習の実施環境：
専門学校4年生/総合臨床実習/8週間/精神科クリニック（精神科デイ・ケア）

実習の特徴

新型コロナウイルス感染症流行等の影響により、初めての精神科領域での実習であった。実習初期には領域や対象者への理解を深め、実習中期以降にMTDLPを活用して対象者との合意目標の設定、各種シートを埋める作業を学生と共に行った。

実習の内容

事例紹介：
対象者は、発達障害と病識のない統合失調症を呈する20代の男性。頑固で意地っ張りな気質があり、不調にも気付きづらい一方で、人に気を使いすぎて疲れやすい面もある。就労意欲が高く真面目な性格であるが、易疲労性や対人面、発達面での課題が病状悪化に結び付くため、就労には至っていない。

実践の流れ：
- 2週目より対象者を担当、評価を開始した。3週目より実習指導者と共に生活行為アセスメント演習シートを記載、4週目に生活行為向上マネジメントシートを記載した。当初は「生活のために仕事がしたい」という対象者の意向と医師の意見を参考に、不得手であったパソコンスキルの獲得を目指した。
- 目標を「仕事をするために週一回パソコンに触わり慣れる」としたが、5週目の介入直後よりパソコンの操作に困難さを抱え、疲労感、ストレス反応がみられるようになったため、「仕事に就く為に敬語やビジネスマナーを学び、言い回しや表現の幅を広げる」と再設定を行った。社会性スキルの獲得から障がい者雇用を目指す方向に目標の転換して作業療法介入を行った。
- 学生は、社会性スキルの獲得として、敬語やビジネスマナーの本を参考に、場面に応じた言葉の選択や困ったときの対応についての課題を準備し、対象者と共に取り組み確認を行った。また、対象者の心理的負荷の状態を確認する声がけを行い、病状悪化につながらないように配慮をした。また、デイケアの活動内で職員や年上のメンバーに実際に使える場面を設定し、その対応について都度フィードバックを行った。

実習指導者の準備：
養成校でMTDLPを実習に導入した当初より、MTDLPを活用した実習指導を行っていた。対象者理解に多面性を持たせるためにも、実習での実践をMTDLPに落とし込む形で展開、他職種と関わる機会を多くもてるようセッティングした。また、病識や生活感を十分に持てていない対象者だったため、合意目標設定等には実習指導者も同席した。

実習後の振り返り：
実習終了後、養成校で指定しているMTDLPのレジュメを使用した症例報告会を実施した。また、作業療法介入の実際（紙面課題に取り組む場面）の一部をOSCEという形態で実施し、課題に混乱する状況にどのように声がけを行ったかシュミレーションを含めて発表してもらった。

学生コメント

MTDLPシートを具体的に埋める作業を通して、自分の評価の偏りや不足に気が付くことができた。実習指導者とのやりとりも、MTDLPシートを使用することで情報を整理しやすく、介入すべき焦点を絞ることができた。

おすすめ度；★★★★☆

実習指導者コメント

学生が取り組んだことを振り返るにあたって、整理がしやすかった。不足情報が視覚化され、学生にとっては使いやすく、実習指導者とのコミュニケーションのツールにもなった。

MTDLPを活用することで、学生の取り組みを整理しやすく視覚化し、実習指導者とのコミュニケーション向上に役立った。

教員コメント

「働きたい」という明確な目標達成に向けて、学生と実習指導者が共通のツールでやりとりすることは、その目標を達成するための１つの手段としてメリットを感じた。目標の転換にも臨機応変に対応できることは強みである。

【実例から学ぶ視点（解説）】
臨床経験がない学生だけでは難しい合意目標の設定を、実習指導者と一緒に行うことで達成可能な目標を立てることができていました。発達障害で病識がない難しい対象者であったと思いますが、「就労」という対象者の希望する目標に導くための段階付けをすることができていました。対象者への負荷が大きいパソコンスキル向上ではなく、社会スキルの向上へとプログラムをうまく変更することができています。MTDLPシートを用いることで多職種との連携や役割分担を見える化できるため、精神科デイケアという多職種で運営している中での実践的な連携場面も教育できた実例だったと思います。

領域別の実習実例

小児期領域

環境調整による役割獲得と人との関わりの拡大を目標に関わった実例

実習の実施環境：
専門学校3年生/総合臨床実習/11週間/小児医療センター

実習の特徴

発達分野での実習は初めての経験であり、学内での授業数も少ない分野となっている。そのため、見学レベルでまず施設や雰囲気に慣れることを重要視した。見学・模倣・実施の流れに沿い、模倣の部分では、実習指導者の思考過程を丁寧に伝える方向で実習を進めた。4週目で評価を終了し、5週目より対象者の全体像をまとめ実習指導者の助言のもと治療プログラムを計画した。10週目より治療プログラムを実習指導者の見守りのもと一部実施する流れとした。

実習の内容

事例紹介：

事例は18トリソミーの7歳女児である。出生時は低体重で、C型食道閉鎖症のため気管食道分離術と胃瘻造設術を施行している。気管切開術も施行し、日中は人工鼻、夜間は呼吸器を装着している。活動前後には吸引やモニター管理を常時行う必要があり、平日は訪問看護師が排痰や入浴介助を行っている。現在特別支援学校に通学し、外来作業療法やデイサービス、ショートステイ、訪問看護を利用し在宅生活を継続している。端座位の耐久性は30分程であり、生活場面では座位保持椅子を使用している。両上肢は動かせるが、物品を空間で操作することや物品を離すことはぎこちない面が目立つ。言葉の表出は見られないが、馴染みのある人の声に反応し、「バイバイ」の言葉に対して、「バイバイ」の動作が可能である。

実践の流れ：

座位が安定し「見る」行為が可能となったこと、馴染みのある人の声には笑顔が見られること、物を把持できること、バイバイの言葉に対しバイバイの動作が可能である等の対象者の強みに目を向け、実習指導者や母親と相談し合意目標を「ひも付きカードを左手で持ち、受付や学校で手渡すことができる」とした。

基本的プログラムでは、物を把持する練習や、相手の「ちょうだい」の言葉と動作に合わせて物を渡す練習を実施した。応用的プログラムでは、母親・実習指導者・学生の順でカードを渡す練習、バギーで受付まで移動する等、実際の場面を想定した模擬練習を行った。社会適応プログラムでは、実際に会計職員へ渡す練習、母親から学校教員へリハビリテーション内容の伝達を行い、学校内で課題の一つとして導入を依頼した。依頼の方法はリハビリテーションの練習場面を母親が動画や写真に残し、学校教員に伝達する形とした。学生の思考は当初、身体機能面に偏りやすい傾向が見られたため、活動から参加を意識した目標やプログラムになる様、対象者の強みに目を向ける助言を強化した。また様々な対象者を見学する機会を設け、治療方法のヒントや思考過程が得られるように配慮した。「カードを運ぶ」という限定した活動を人に渡すという役割行動へ繋げていくことで、対象者が他者と関わる参加場面を拡充できることを目指す方向性に学生が気づくことができた。

実習指導者の準備：

実習指導者は、見学場面において学生が助手として動ける場面設定を積極的に設け、治療場面に学生が自然と参加しやすい空間作りを意識した。他職種や母親に対して、学生自身が情報収集を行い、多職種連携・情報の引き出し方を学べるように場面設定を行った。

実習後の振り返り：

事例報告書をまとめ、下級生も参加した形で学内発表を行った。事例報告書には、アセスメント演習シート、プラン演習シートに加え、A4サイズ1枚に、対象者情報・評価内容の要約・統合と解釈を記載した。

学生コメント

今回の実習は作業療法の意義について深く考える機会となった。予後予測を行う中で、対象者の過去・現在・未来を考えながら作業療法を組み立て、より豊かに生きるための支援を提供するという考え方に多くの学びがあった。シートを活用することで、膨大な情報が整理され、複雑で煩雑だった状態から必要な情報が明確になった。身体機能面に視野が偏りやすい傾向に関しても、シートに視覚化することでより意識することができた。作業療法のプロセスが効率的かつ効果的に進められること、対象者のニーズに適切に応えるためには、バランスよく視点を捉えることが重要だと学ぶことができた。

おすすめ度；★★★★☆

実習指導者コメント

限られた期間のなかで、膨大な情報から優先度を考えて実践することは難しいが、MTDLPを活用することで作業療法プロセスを可視化して整理することができたのではないか。今回の対象者に「できないこと」は多いが、実習指導者、対象者、母親との関わりを通して「強み」に目を向けたプランを立てることができたのではないだろうか。

Point!

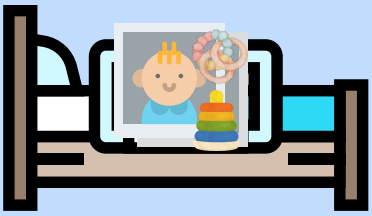
MTDLPを活用することで、学生の取り組みを整理しやすく視覚化し、実習指導者とのコミュニケーション向上に役立った。

教員コメント

過去・現在・未来の視点を学び体験することで、より作業療法の可能性や楽しさを感じることが出来たのではないか。難しさ、知識不足を痛感する中でも、実習指導者の導きや安心できる環境配慮により、学生は自身で考えることを継続でき、悩みながらも作業療法士の思考過程を模倣・実施することができたと思う。

【実例から学ぶ視点（解説）】

週１回の外来作業療法において、対象者や家族と学生をうまく結びつける下準備をしっかりされています。対象者の「できない事」や「機能面」ばかりに視点がいきがちであるが、「より豊かに生きるための支援」として、「活動や参加」、「環境」を意識させて目標を考える工夫をされています。また、学生を助手として意識させ、治療への介入や他職腫や母親にも情報収集する機会を設け、MTDLPを通して、対象者のニーズや全体像を整理しやすい工夫をされています。この実習を通して、作業療法の臨床思考はもちろん、作業療法の可能性や楽しさ、難しさ、作業療法の意義を感じることが出来たと思います。



少ない時間でも充実した入所生活を！
～遊びを通して人と関わる方法を見つけられた実例～

実習の実施環境：
専門学校4年生/総合臨床実習/8週間/小児医療センター

実習の特徴

3年次の評価実習においてもMTDLPでの発達領域の実習経験がある学生であった。今回の対象者は重症心身障がい児者施設に長期入所中であり、対象者・両親からの聞き取りができず、MTDLPを活用して対象者の把握・目標設定・介入を行うまで手探り状態であり、実習指導者が学生を導いていった。

実習の内容

事例紹介：

対象者は40代女性，原因不明の脳性麻痺で長期入所している。人と関わることやおもちゃで遊ぶことを好んでいる。しかし，病棟職員の業務の多忙さにより入所者一人ひとりに対して関わる時間が少なく対象者との関りも少なくなっている。おもちゃについては口に運ぼうとすることが多く見られ、止めないと噛みちぎって食べてしまい、窒息や口に物を入れる異食の危険性があり制限されている。

実践の流れ：

- 評価と治療を合わせて週３回×８週間の介入を行なった。
- 生活行為のアセスメントを整理する際、対象者が入所生活をより楽しく過ごせる方法を考えるように実習指導者からのアドバイスを受けた。他職種の情報や評価をもとにケースの人と関わることが好きという強みを活かし、楽しく過ごすために必要な目標を考えた。介入は学生が自分で考えたものを実践しその都度助言をもらい、治療内容を修正した。
- 実習指導者からおもちゃ遊びよりも、人とのやり取り遊びによって欲求の表出を促すと良いとのアドバイスをもらい、光って音がするおもちゃで遊ぶだけでなく、反応をみながら対象者とのやりとりを積極的に取り入れた。その結果、介入２週目から徐々に対象者の欲求の表出が増えた。
- 開始当初は覚醒調節が難しかったが、介入３週目から訓練時に寝ることはなくなった。実習指導者のフィードバックにより、介入前後の変化を他職種から話を聞くだけでなく、１日どれくらいの時間起きているのか確認し比較することで変化が明確となった。
- 遊びの拡大については、把持したおもちゃを口に入れるなど直接的に操作する遊び方をしていた。一緒に行うことで棒に輪を通すと音や光が出るなど間接的におもちゃを操作して遊べるようになった。遊び方の理解と成功体験に結び付くような関わりをしたところ、自発的に輪を把持し棒にリーチする様子が見られるようになった。
- 生活行為向上プランの支援者である病棟職員に対象者の理解を深めてもらえるようにベッド柵に上手に遊んでいる写真などをいれてレジュメを取り付けた。また、対象者の担当看護師と支援員に実習によって得られた情報を共有した。

実習指導者の準備：

対象者は重症心身障がい児者施設に長期入院されており、人と関わることやおもちゃで遊ぶことを好むが現在の状況では余暇時間を楽しんで過ごすことが難しく、今回の実習を機に学生が介入することで楽しみが増え、生活に潤いが出ると考え、本対象者に協力して頂いた。

実習後の振り返り：

実習終了後、MTDLPの枠組みに基づくレジュメ、生活行為向上マネジメントシートを使用して対象者の発表を実施した。発表後すぐに実際の治療場面の一部を再現する形（学生：セラピスト・教員：患者役）でOSCE（客観的臨床能力試験）を実施し、卒業生からコメントを頂き、振り返りが図れた。

学生コメント

MTDLPを用いることで対象者の情報を簡潔にまとめることができた。また実習報告を行った際にも要点がまとまっているため、伝わりやすい発表が行えたと思う。

おすすめ度；★★★★★

実習指導者コメント

今回の実習では、初回評価-作業療法プログラム立案-プログラムの実施をした後に機能面中心のアプローチから、対象者のニーズに対するアプローチと環境面へのアプローチへと軌道修正をすることができ、柔軟に対応できた。重症心身障がい者施設ではMTDLPのマニュアル通りに実習を進めていくことは難しいが、MTDLPの考え方をうまく活用して取り組めていた。

Point!! ニーズと環境に合わせた柔軟なMTDLPの考え方を活かし、重症心身障がい者施設で実習を成功させた。

教員コメント

実習終了後、対象者の発表・OSCEを実施。MTDLPの使用により、学生の対象者に対する思考がわかりやすく整理できており、ストーリーが理解しやすい発表だった。実際の発表に基づき教員が患者役を演じた際、実習指導者と学生の介入ポイントがすぐに理解することができた。MTDLPを活用することは、対象者に対する介入の方向性が共有しやすいと思った。

【実例から学ぶ視点（解説）】

この実例は、対象者・ご家族への聞き取りが難しい長期入所中の方を対象者としており、学生にはやや難易度が高いと考えられました。そこで実習指導者は、具体的なアドバイスをすることや、MTDLPシートでの情報整理を支援することで、対象者の強みを活かした目標設定や介入を学生が経験できるように指導を行っています。また実習後の振り返りには、MTDLPの枠組みに基づくレジュメと生活行為向上マネジメントシートを利用することで、要点がまとまり、発表の成功へ結びついています。

コラム

目標の聞き取り～目標設定の工夫

コラム：
4.1目標の聞き取り～目標設定の工夫（養成校）

聞き取りは、対象者の意味のある生活行為を理解するための大切な過程である。一方で、臨床で行われる面接の目的は多岐にわたる。情報収集のほか、治療技法を含む場合や作業的ストーリーテリングとして対象者と作業にまつわる人生物語を作るために行われることもある。MTDLPの聞き取りの主要な目的は情報収集であり、学内教育で行う場合には対象者のニーズを探求するとともに、対象者特有の生活行為の行い方や意味を見つけることが目的となる。そのため、生活行為が行われる文脈を踏まえ、5W1Hの視点を交えながら具体的に聞き取れる能力の習得を目指す。それが、対象者と協業しながら合意目標を立案することにもつながる。

学内教育では、半構造的面接の行い方に加え、聞き取りを補完する興味関心チェックリストやCOPMの使い方も併せて学習する。臨床現場で聞き取りを行う場合、行いたいことを聞かれてすぐに答えられる対象者は多くない。そこで、学内教育では、聞き取りの際の位置関係や態度等の面接技法に加え、対象者のニーズや対象者特有のやり方を理解するために具体的に何を尋ねれば良いのかを学習してもらう。つまり、生活行為を理解するための問いの立て方を学習してもらうのである。前述した5W1Hの枠組みを使い、具体的な質問項目を考えることや、多様な対象者を想定して質問の仕方を考えるグループワークも役に立つ。一方、興味関心チェックリストやCOPMの学習では、目的や基本的な手順の理解に留まらず、何故その生活行為が選択され、どの工程や遂行に課題を抱えているかの聞き取りが必要なことも学習してもらう。例えば、「料理」という回答に対し、家事役割を大切に思う気持ちや朝食を短時間で準備することに課題を感じていることがわかると、個人因子を踏まえた合意目標やプログラムの設定に活かされる。聞き取りの練習は、学内教育でも、見学、模倣、実施の手順を踏み、学生同士から対象者へと段階的な経験が望まれる。

コラム：
4.2目標の聞き取り～目標設定の工夫（精神科領域）

1．聞き取り

精神障害のある人に生活行為の聞き取りを行う際、言語理解能力や現実検討能力、思考障害等の影響によってスムースに聞き取りが行えない場合がある。このため次のように段階づけしながら聞き取りの練習を行う。

1）聞き取りを行う意義に関する講義

なぜ生活行為の聞き取りを行うのか？を理解させることが重要である。生活行為向上に取り組んだ対象者がどのように変化したか、実例を示すと伝わりやすい。

2）学生同士のロールプレイ

学生同士で生活行為聞き取りシートを用いて聞き取り面接を行う。

3）学生同士のロールプレイ（対象者・作業療法士役）

臨床でしばしば聞かれる回答例（表1）を提示し、学生が対象者役、作業療法士役を演じて聞き取り面接を行い、どのように工夫して聞き取ったかを発表させる。

4）対象者への聞き取り演習

演習や実習を通して、実際の対象者に生活行為を聞き取る機会を設けるとよい。

表 1

カテゴリ	回答例	工夫
意欲低下	何もしたくない	• ナラティブスロープを書きながら聞き取る • 簡単な作業を実際にしながら、興味・関心を探る • 聞き取りはやめて、またの機会にする
機能レベルの回答	幻聴を治したい	• 幻聴が治ったら「何がしたいか」を尋ねる • 作業歴を聞き取り、今できているか、したいことはないかを尋ねる
病的体験に基づく発言	神様になりたい	• 神様になれば何が得られるのか、目的と手段の関係を意識して、追加の質問をする
社会的に容認し辛い発言	○○先生を叩きたい	• なぜ、そう思うのかを聞き取り、現実的な方法で欲求を満たす方法を検討する

２．目標設定

聞き取りの結果に基づいてアセスメントし、対象者と話し合いながら合意目標を設定する。この際、SMARTな目標（表2）を設定する。ただし、うつ病の対象者では、具体的で時間制約がある目標により、達成へのプレッシャーが強くなり、どうせできないと悲観的になる場合がある。目標の合意形成は、急性期の精神状態が不安的な時期は避ける等の配慮が必要である。

また，精神科特有の目標例として「自信を回復する」「自己愛を満たす」などがあるが、これらは自己内界の変化であるため、測定困難で、目標達成したかどうかの判断も難しくなる。生活行為目標立案に際しては、遂行レベルの目標を設定することが肝要であり、「〇〇できる」「〇〇をする」等、動詞形にすることがコツである。

表２

SMARTな目標	
S	Specific（具体的な）
M	Measurable（測定可能な）
A	Achievable（達成可能な）
R	Related（対象者の希望やリハビリテーションゴールに関連した）
T	Time-bound（時間制約がある）

コラム：
4.3目標の聞き取り～目標設定の工夫（認知症）

認知症の方に対してMTDLPは活用しにくいイメージがありますが、それは「聞き取り（インテーク）」が難しいからではないでしょうか。確かに、質問を理解してもらえなかったり、会話のキャッチボールが難しい対象者から、具体的な生活目標を聞き出すことは困難です。しかし、それは対象者がうまく表出できないだけであり、対象者にはそれぞれ望んでいる生活行為があって、自分らしい作業や落ち着ける作業、さらには継続してきた役割や習慣があるはずです。どうやったら作業療法士は対象者の想いに歩み寄ることができるのでしょうか？

このようなケースに対しては、対象者からの聞き取りだけでなく、想いに歩み寄るための工夫が大切となります。例えば、「生活歴や作業歴への理解を深め馴染みの作業を実施し、その時の様子を参考にする」「家族など対象者に近しい人から対象者の思いを代弁してもらい、参考にする」といった工夫を加えながら、「対象者の望む生活行為は何か？自分らしい作業や落ち着ける作業は？今まで継続してきた役割や習慣は？」といったポイントを収集するのです。こういった経験を通して、対象者理解の大切さと応用力が養われていくでしょう。

次に目標の設定です。認知症の方が自分らしい生活を取り戻し穏やかに過ごせることを思い描きながら、24時間の生活像を具体的な目標として設定します。機能面の回復や出来ないことだけに焦点が当てられた目標やプログラムは、認知症の方にとってその意味や見通しが持ちづらいため成果が得られにくく、関わりが終わると元に戻りがちです。「門から玄関までの2段の段差昇降が安全にできる」は間違いではないのですが、通所介護に通うシーンや毎朝新聞を取りに行く習慣の中に段差昇降を位置付けるなど、生活行為に包含させるところまで考え、目標設定に活かすよう支援しましょう。環境への働きかけも重要です。手すりの設置といった環境整備だけでなく、関わりのある人に対する働きかけや、各種サービス・制度の活用を検討して目標設定に生かします。この点に対する検討は学生には難しいので、実習指導者がリードしながら進めると良いでしょう。

コラム：
4.4目標の聞き取り～目標設定の工夫（小児期領域）

小児領域の子どもたちは成長していく事に加え、就園や就学など、1年単位で対象者の環境が大きく変わっていく。その中で、子どもや保護者にとって課題が明確なこともあれば、何につまづいているのかがわからないケースも少なくない。そのため、聞き取りの目的は、子どもの全体像の把握とおおまかな方針を決定することであり、その情報を引き出すために、まずは「保護者の考えを整理していくこと」が重要となってくる。
考えを整理するにあたり、1日や1週間の流れで生活状況を把握することや、MTDLPシートを使用して各項目との関連を考えることが必要になるが、より具体的に聞き取ることが重要となる。例えば、「ご飯を食べるスピードが遅い」というエピソードがあった場合、保育園の給食の時間なのか、自宅での朝ご飯なのか、その子どもがご飯を食べるという作業において、スピードを要求されるのはいつなのかということ、また、早く食べられることによって、拡がる作業、遅いことで損なわれる作業までをOT、保護者のお互いがイメージすることが重要である。

目標設定で重要な点として、課題となる事柄に優先順位をつけることと、その課題ができないことでどういった不具合が起きているか、それが達成できるとどういったことに良い影響を与えるかについて考えることである。

目標は機能性ばかりに焦点があたりやすいが、例えば、「字を書けるようになって欲しい」という希望に対して、「学校で配られたプリントに名前を書くことができる」、「国語の時間に作文を書くことができる」等、どの場面でどのような課題を行うための機能なのかを関連付けることを、子どもと保護者と一緒に行うことで、より具体的な目標の合意形成が行えるのではないかと考える。

付録：
協力校制度の概要、研修会の紹介、ガイドの紹介

MTDLP推進協力校認定制度は、「MTDLP教育の普及・啓発・推進」を目的として2014年に開始した。この制度の特徴は、MTDLP教育に寄与できる作業療法士養成校の審査・認定を行うことであり、“MTDLP推進協力強化校”と“MTDLP推進協力校”の2つの基準を設けている。

1．MTDLP推進協力強化校

提出されたMTDLP推進協力強化校認定申請書を審査し、以下の基準をすべて満たす養成校を“MTDLP推進協力強化校”と認定する。

（共通1）WFOT認定校である

（共通2）専任教員が6名以上在籍し、全員が日本作業療法士協会および都道府県士会の会員である

（共通3）MTDLPの概論や演習を実施している

（共通4）都道府県士会主催のMTDLP研修に協力している

（共通5）臨床実習でMTDLPの利用を推進している

（共通6）専任教員がMTDLP研修を履修している

（7）MTDLP教育推進に関しモデル的な取り組みを行っており且つその内容や成果を学会等で発表している

2．MTDLP推進協力校について

提出されたMTDLP推進協力校認定申請書を審査し、以下の基準をすべて満たす養成校を“MTDLP推進協力校”と認定する。

（共通1）～（共通6）

2024年３月現在、“MTDLP推進協力強化校”および“MTDLP推進協力校”に認定されている養成校名は以下である。

・MTDLP推進協力強化校（10校）*順不同

札幌医科大学、八千代リハビリテーション学院、横浜リハビリテーション専門学校、
大阪医療福祉専門学校（夜間部）、関西総合リハビリテーション専門学校、
YMCA 米子医療福祉専門学校、四国医療専門学校、岡山医療専門職大学、
専門学校穴吹リハビリテーションカレッジ、土佐リハビリテーションカレッジ

・MTDLP推進協力校（19校21課程）*順不同

北海道文教大学、岩手リハビリテーション学院、国際医療福祉大学、目白大学、
多摩リハビリテーション学院専門学校、藍野大学、広島大学、広島都市学園大学、
愛媛十全医療学院、大分リハビリテーション専門学校、静岡医療科学専門大学校、
東京医療学院大学、平成リハビリテーション専門学校、川崎医療福祉大学、秋田大学、
琉球リハビリテーション学院（昼間主、夜間主）、帝京平成大学、
日本リハビリテーション専門学校（昼間部、夜間部）、リハビリテーションカレッジ島根

付録【重点課題研修について】

協会は、年度事業計画における重点活動項目に関連したものや作業療法の最新のトピックなどを取り扱う研修として、“重点課題研修”を位置づけている。令和5年度、教育部養成教育課MTDLP教育推進班では、2つの講座を重点課題研修として開催しており、以下それぞれの講座について紹介する。

・講座1：MTDLP教育を理解する教員研修

この研修は、2015年度に当時のすべての作業療法士養成校を対象に開催したMTDLP教員研修を引き継ぎ、新たな内容を加えたものである。対象者は、教員であり、養成校でMTDLPを学生に教授する教員が理解しておくべき基本的知識と考え方を学ぶことが目的である。年1回、例年夏頃に開催している。

内容は、「MTDLPを卒前教育で教授するための指針」や「MTDLPの授業と臨床実習の進め方」、「MTDLP講義・演習の実際」、「MTDLPを活用している臨床実習指導者の視点」があり、MTDLP教育を理解し、自校で推進するための手掛かりが得られるものである。

・講座2：教員と実習指導者のためのMTDLP教育法

研修の対象は、教員と実習指導者であり、それぞれが学生や新人作業療法士に活動と参加へ焦点を当てた作業療法を教育する際のツールとしてMTDLPの活用を学ぶことを目的としている。年2回（秋・冬）に開催している。

内容は、「教育ツールとしてのMTDLP活用や実践例の紹介」、「MTDLPアプリケーションの開発」、「養成教育におけるMTDLPアプリケーションの活用紹介」がある。

それぞれの講座の詳細は、
協会ホームページ➡会員向け情報➡研修会一覧からご確認ください。

- **MTDLP活用した作業療法参加型臨床実習ガイドの紹介；**

協会ホームページ➡会員向け情報➡養成教育からダウンロードください。

URL;https://www.jaot.or.jp/files/MTDLP.guide.pdf

付録：
MTDLP推進協力校連絡会について

MTDLP推進協力校連絡会（以下、連絡会）は、強化校および協力校間の情報交換を促進するために2020年9月から年4回、約90分（18時30分から20時00分）で開催しており、毎回ほぼすべての強化校・協力校の参加がある。内容は、主に講演やグループディスカッション、情報交換会であり、2023年度に開催した第1回から第3回の内容を表に示す。

表　2023年度MTDLP推進協力校連絡会の内容（第4回は2024年3月に開催予定）

開催回	内容
第1回	・新規強化校の取り組み紹介 ・MTDLPを活用した臨床実習指導の流れとポイント臨床の立場から ・MTDLPを活用した作業療法参加型臨床実習ガイドの活かし方
第2回	・四国・九州ブロック企画「若い臨床家からのMTDLP活用の実情」 ・臨床実習に関連する教育的取り組みについてのグループディスカッション ①（実習直前）MTDLPに関するセミナー ②（実習中）レジュメ書式の工夫 ③（実習後）事例報告会の方法 ④（実習後）下級生との情報交換会の方法
第3回 オブザーバー 可	・MTDLP教育に関する相談会 ・MTDLPを活用した作業療法参加型臨床実習の提案

連絡会への参加は、MTDLP教育に関する情報発信・共有の場として他校の教育内容を知る機会となり、より広い視野でMTDLP教育を捉えるきっかけになる。さらに自校の取り組みを内省する機会に繋がり、さらなる教育の充実・発展に寄与する可能性もある。このように連絡会は、強化校・協力校が相互に意識しながら切磋琢磨できる場として意義がある。
連絡会には、年1回、MTDLP教育の拡充を図るため協力校や強化校以外の養成校がオブザーバーとして参加できる。2023年度の第3回連絡会では、およそ30名のオブザーバー参加があり、MTDLP教育に関する相談会を実施した。相談会後のアンケート結果（図）は、“次回の相談会にも参加したいと思う” 88.9%、”MTDLP教育に関する有意義な情報を得る機会になった” 96.3%と、オブザーバー参加した養成校にとっても良い機会になったことが窺える。
オブザーバー参加が可能な連絡会の開催案内は、協会からすべての養成校へメール配信しており、今後、さらに多くの養成校から教員の参加があることを願っている。

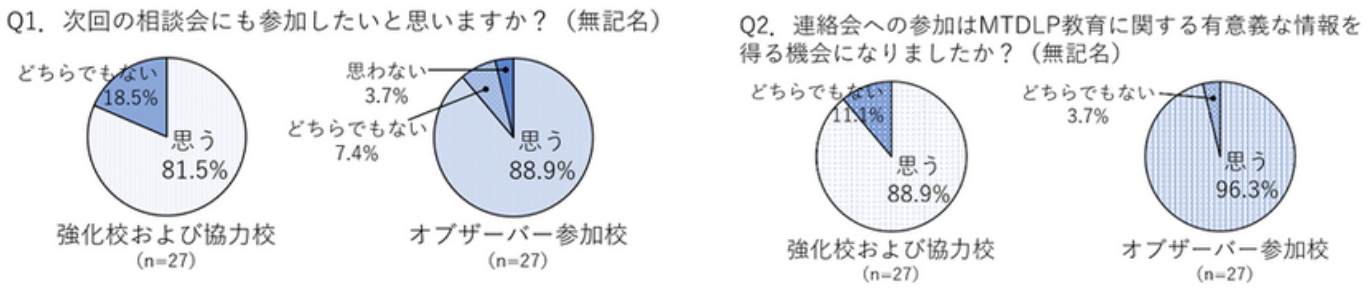


図　連絡会のアンケート結果

編集協力者及び執筆協力者一覧

編集協力者（五十音順）

小林　幸治（MTDLP教育推進班長・目白大学）
桂　雅俊（土佐リハビリテーションカレッジ）
纐纈　功（橋本病院）
熊谷　隆史（医療福祉専門学校　緑生館）
西城　学（岩手リハビリテーション学院）
佐藤　純（介護老人保健施設花水木）
白鳥　慶司（ウトナイ病院）
鈴木　孝治（金城大学）
竹田　和也（金田病院）
徳地　亮（川崎医療福祉大学）
真下　いずみ（藍野大学）
松本　嘉次郎（四国医療専門学校）
水島　眞由美（横浜リハビリテーション専門学校）

執筆協力者（五十音順）

石井　有希（横浜リハビリテーション専門学校）
石塚　匠海（丘整形外科病院）
内山　博之（横浜リハビリテーション専門学校）
沖　英一（和仁会病院）
柿崎　崇（小澤こころのクリニック）
勝原　勇希（神戸医療福祉センター　にこにこハウス）
桂　雅俊（土佐リハビリテーションカレッジ）
鎌田　小百合（多摩リハビリテーション学院専門学校）
鎌田　雄大（滝宮総合病院）
小林　幸治（目白大学）
坂上　真理（札幌医科大学）
坂本　和弥（リハビリテーション病院すこやかな杜）
佐藤　純（介護老人保健施設花水木）
佐平　安紀子（平成リハビリテーション専門学校）
柴田　美雅（日本リハビリテーション専門学校）
善波　宏光（横浜療育医療センター）
十河　正樹（岡山医療専門職大学）
竹田　和也（金田病院）
田村　浩介（いきがいのまちデイサービス美里）
田村　美由紀（和仁会病院）
長谷　理恵（横浜リハビリテーション専門学校）
徳地　亮（川崎医療福祉大学）
都甲　幹太（あやめの里）
中井　卓（社のホスピタル）
中川　真人（介護老人保健施設白寿の杜白寿の社）
長尾　将利（藍野療育園）
西川　洋（四国医療専門学校）
西村　昭宣（琉球リハビリテーション学院）
丹羽　敦（福岡国際医療福祉大学）
馬場　広志（穴吹リハビリテーションカレッジ）
尾藤　祥子（藍野大学）
藤井　真人（西横浜国際総合病院）
真下　いずみ（藍野大学）
三輪　尚人（静岡医療科学専門大学校）
屋富祖　菜摘（宮里病院）
米井　浩太郎（老人保健施設　虹）

発行責任者

三澤 一登（一般社団法人日本作業療法士協会　副会長）
早坂 友成（一般社団法人日本作業療法士協会　常務理事）
竹中 佐江子（一般社団法人日本作業療法士協会　理事・教育部長）

01